

ある。多くの門弟達の騎虎の勢を驅つたのではなくして余儀なく虎に騎せられ義と愛に殉じたのであつた。或は南洲翁が明治六年の末故山に歸つてから、明治十年の始めに至る約三ヶ年の間に日本の大勢は急激に進歩變化した。その爲九州の邊隅にあつて自然を友としてゐた翁は不幸にして日本の大勢に後れたのではあるまいか。それが門弟子のための義に殉ずること、なり武力的解決の手段を以て明治十年に於て時の政局に向つて試んとした翁の立場であつたかも知れない。

偉大なる英雄の末路として潔いといふもの、翁の心事を思へば實に悲慘であり、日本のためにはまことに惜しい死であつた。

坂本龍馬氏の評に「初めて西郷に會す、其の人物茫然として模捉すべからず、之を大きく叩けば大きく鳴り、之を小さく叩けば小さく鳴る。」と、英雄は英雄を知る。此の一言によりて吾々は大西郷の偉大さを益々確信するのである。

又「吉之助の一語、死を以て之を踏む。」とは吾々が時々書中に見る所である。この大男子の然諾こそ眞に彼に於て見られたのであつた。吾々は大西郷の名を口にする時言ひ知れぬ力張さを感じその質朴にして而も偉大なる男らしい男の人格に打たれる。

自然な、迫らざる堂々たる大人物。決すれば斷乎として進み、常に大所高所に立つてその所信を盡し、その所従のため

には命をも捨てる。その信、その義、その量は何れも永く後世に尊敬せられるところであり、われわれノノ學徒にとつて、大いに學ぶべき幾多の教訓を與へてゐる。

ひがへつて日本の現狀を見、前途を思ふとき、政治に外交に益々偉大なる人格の輩出を思ふ。東洋の平和のため、世界外交の難局に處し、或は國內の政局を見て再び大西郷よ出てよ、昭和の西郷よ出てよと叫びたい。日本の明日を前途の大洋に導くためには吾々學生として、大西郷の風格に襟度に學ぶべき多くのものがあるが、より以上に昭和の救世主として大西郷の再現を希ふ心が切である。

## 中學時代

五年 都築 二郎

中學生活、それは我々の將來を定むる時代である。此の時代に吾人の特色獨自性は遺憾なく發揮せらる。各人の將來が決定するのゆゑある。然し一面に於て然様に重要な時代ではあるが、この過渡期は或は品性を下劣なものにしたり將來を望む價值なき人間に成り勝ちの時でもある。之が恐しいのである。自尊心強き者が所謂いぢけた意氣地なしに成り、或は存在も無き少年が素直にのびて成功の礎を基き、又意氣盛んな青年が自暴自棄に成つてしまふ。然るに此等を誰が救ふのかの將來と大なる關係が有るものだと思へ。斯くして自己意識が強まり、又感激多き日を有効に過し自己の獨自性、特色を發揮して素直に伸びてゆくのである。

## スポーツ精神

五年 和田 一之

スポーツ精神とは運動と健康とに依つて構成せられる一切の品性を言ひ、以て世界民族を融合せしめて、地上に神の國を築かんとする人間的良心を言ふのである。

朋友と坐しては質樸正義の情となり、國家の非常時に直面しては堅忍不拔の念となる。この精神は、五色の環に平和を象徴するオリンピックのマークであり、勝利の君ヶ代に沸騰する感激の血潮そのものなのだ。何時の時代でも人種の如何を問はず、吾々人間の血潮の中には常に見んとして見得ないスポーツ精神なるものが潜んで居る。遠きは吾が武士道の興つた鎌倉時代以後、彼等「サムライ」は到る所に於て禮儀を尊び正義を貫くに其一命を以て犠牲に供し、彼等の崇高なる精神は卑怯未練を恥ぢ清廉潔白を誓つてその使命を全うしたのである。かの古代の士魂と云ひ、又近き日本の正義の戦といひ、又は堂々と孤獨の對立を以て泰然自若として、萬國を相手に聯盟を脱退せる時の吾が松岡全權の剛健なる精神と言

先生は悪友を近かつけるなど既に少學時代に於て教へて居る『自暴者不可與有言也、自暴者不可與有爲也』と云ふ語もある。各人が自覺を以て自分を救ふことだ。他人によつて感激性に富んだ中學時代は如何様にも動く。その動く一歩手前に於て、自分と自分を動かすものは又自己だ。第三者の立場より見よ。自己の魂を放れて自己を見よ。然し斯様に自覺なきものは、人に暴言され苦しめられて直に動き、永久に取返しのかぬ人間に成る事も有る。たとひさしたる事なくもその時に感激した心を以て觀察した狀況なる場合でも將來に於て自己の不利をまねく。誤解となる。或は友により心を激し或は師の言に感じた時、ほめられたにせよ叱られたにせよ其の時にそれを眞面目に受ける時は殆どない。驕るか、ひがむかである斯様にして彼等は至つて間違つて成長し易い。故に吾々青年は常に感激し易き時に限り隱忍自重し正しく自己の進路を見究めるだけの沈著と、一旦正しいと思つた路には萬難を排して進むだけの勇氣とを養ひ、以て感激多き青年時代に處して行き進んで社會に出てからも、眞に其の人を見て忠告し導かうと努めて呉れる人の無い社會の荒波に乗りつゝ、しつかり自己の目的を見て進み決して自暴自棄に陥らぬやうに中學時代にしつかり素地を養成して置かねばならぬ。先づ自己を知れ。意志を強くもて。又人にも充分自己を知つてもらへ。自己を知つて呉れる人が自己に對して告げる事は我々

ひ、これみな現今津々浦々に叫ばれて居る所謂スポーツ精神の眞隨と一致せる人間道徳のはたらきである。

最近教育上に、或は職業上に喧々囂々として論ぜられて居るスポーツ精神なるものは、之を運動競技に於て見て正々堂々と、清廉なる精神を寸時も忘れず、自分の最善を盡す事に努力する光明の精神である。所謂「俯仰不愧天地」の麗はしき精神を云ふのである。勝敗の顛末を吟味し以てスポーツ精神を臆測するが如きは人間の疎漏である。又第二義としては勝敗の如何に關せず、終始一貫して毫もゆるぎなく、常にその清純さを保つ精神こそは眞のスポーツ精神と云へよう。思想國難、外交國難の憂漸く高まり、動もすれば輕佻浮薄の甘風に身を委ねんとして腐敗に沈め行く幾多の青壯年を顧みる時、吾々は自ら尊きスポーツ精神の再認識を強ひ、又要求せずには居れない。事に際し勇猛、果敢にして少しも躊躇を知らないかの熱血兒宰相ムツリニの全身には此のスポーツ精神が潮の様に流れて居るのだらう。この事は熟考すれば自らに首肯出来る。

スポーツ精神の中には道徳上のあらゆる美點が含まれて居る。故に國家の中堅たる吾々若人は人格の向上、惹いては國家の興隆に與つて多大なる影響を及ぼすスポーツ精神の眞の理解とその習得に努めねばならぬ。而も健全なる此のスポーツ精神こそは將に、大器を成さんとする吾等若人には、なく所甚だ大なるがためとある。此の點我々はスポーツの精神の一般化への普及の必要を痛感する。かるが故に我等はスポーツの精神を理解遵奉し、スポーツの神髓に生きねばならぬ。我等は我等世界人が、スポーツの精神に依つてこそ始めて世界平和の光明の見出されることを確信するものである。

## ス ポ ー ツ

五年 上村 文吉

碧空隈なく晴れて、蒼穹に横溢する三伏の熱氣。  
鬱蒼と茂る木々の青緑に心躍る若人の意氣。

マウンドに立つピッチャーの——第一球を投げんとする姿、  
絢爛豪華の争覇繪巻が今や展開されんとする。天地何者ぞ。  
何の愧づる所あらん。スタンドに響く衝天の拍手喝采！  
ファンは今熱狂、一球一打にも視線を其處へと走らせてゐる。  
今やグラウンドは炎天下のオワシスだ。

走れ!!打て!!若人の意氣は大にも冲せんとするのである。  
轉じて彼方を見よ! 遠くベルリンに於ては日章旗は翻  
とひるがへつてゐるではないか。

五輪の旗は颯爽其の雄姿を現はしてゐるオリンピックック大會  
だ。二十五ヶ國のチャンピオンはトヲツクに、フィールドに  
スイミングに、ホッケーに………全エネルギーを消滅す

はなら唯一の一大要素ではなからうか。

再び言ふ。スポーツ精神はスポーツの爲の精神ではなくして  
スポーツに依つて養成せられるもの、即ちスポーツから獨  
立した人間として又は國民としての觀念でなければならぬ  
のである。

## ス ポ ー ツ 精 神

五年 的 場 峻

スポーツは人生の慰安であり、刺戟であり享樂である。文  
明の進歩はスポーツの進歩を齎らし、スポーツの發達するの  
は文明發達のシンボルなのである。従つてスポーツは文明人  
にのみ許された特權であり、之を爲す者には必然文明人たる  
ことを表明する何等かのものが存在す。これが「スポーツの  
精神」なのである。「スポーツの精神」は飽くまで紳士的で  
あり、公平無私、眞にフェアプレイの精神でなくてはならぬ  
大敵たりとも恐れず、小敵たりとも侮らず、飽くまでスポー  
ツの神髓に生きねばならぬ。がのデ杯戦に於ける我が清水選  
手のあの麗しい態度、あゝした態度こそスポーツの眞髓を發  
揮したものと云へよう。

近時の國際間の軋轢は今やその極に達して、世界の危機が  
叫れてゐる。これ國際外交上に於てスポーツの精神の缺くる  
るとも何の悔む所ぞ、とたゞ母國の名譽の爲否全世界の爲に  
犠牲的精神を拂つて奮闘してゐる。

我がチャンピオンの奮闘は實に目覚ましいものである。然  
して敗れては一掬の涙、勝ちても一掬の涙、そのスポーツの  
涙こそスポーツマンスピリットのエッセンスである。我が選  
士が遠く異境で勇躍戦つてゐる姿が、やがてスポーツ日本の  
名を世界隈なくひろげると共に、日本のスポーツの地位を一  
段と向上するものとだと私も又涙を吞んで喜ぶ。

スポーツは又其れ自身人間完成の一機關である。現代の中  
學生間にはもはやスポーツ排撃を行ふものがある。ひとし  
くスポーツによつて心身を陶冶してゐる。他で修養できない  
点を修養して人間完成につとめてゐる。世界は今やスポーツ  
の殿堂と化せられんとする。スポーツマンたる我々はこゝに  
彦中スポーツ殿堂を完成せんと亦奮闘してゐるのである。  
我が彦中の運動部よ、進めこの意氣の下に進め。  
オリンピックは一九四〇年にあると心して。

## 熱 球

五年 太田 英夫

空はからりと晴れた晴天だつた。  
そしてスタンドは興奮と熱狂との渦が巻いて母校を、代表

する選手の顔も勝たずば止まぬ意氣に燃えてゐた。校長先生始め關係者一同の心配さうな顔もバクネット裏に見えてゐた。つらい楽しい合宿猛練習も終つて、今や京津大會豫選の幕は切つ落されようとする。觀衆の聲援裡にシートノックは終つた。球場になまぬるい一陣の風がさつと吹いて、今迄騒いでゐた觀衆も静まつた。嵐の前の静寂と云ふ所、

やがて高鳴る試合開始のサイレン。血と涙と汗のグラウンド生活總決算の日、澄み切つた天地は今漸く戦塵をはらまんとする。

『元氣で行け』

去年の恨を此の一聲に掛けて、僕は全員を激勵した。一回／＼回を重ねる毎に亦其の一打一投にフアンの一喜一憂又聲援、眞に涙ぐまじきものがあつた。八回迄双方〇、併し彦中ナインの雪辱必勝の意氣は更に高く觀衆の燃狂に相俟つて熱球砂を嘯む意氣と熱、この絶情を傾けつくし終始試合を優勢に進め、よく好敵の追撃をしりぞけ、遂に緑の大旗は彦中の頭上に輝いた。

嗚呼雌伏茲に正しく四星霜、辛苦困難と闘ひ來つたことも全く今日あるを期待しての事であつた。

『又一しきり萬歳の聲』感激の涙は止めさもなく流れる。大なる期待に尊き歴史を脊負つて立つた吾々は遂に其の責任の一部を果したのだ。併し、戦はこれからだ。豫選の第二階

吾々を見捨てたのであつたらうか。

『彦中！よく頑張つて呉れたッ』

『意氣では勝つたのだぞ。』さうだ。吾等は意氣では彼を凌駕したのだ。自分等は決して先輩の名譽を傷つけなかつた筈だ。嗚呼——然し残念だ。無念だ。自分の野球生活もこれで終つたのか。一同は愁然として居る。唯涙にかすんだ私の目に見えるのは私の涙、涙の間から見える戦友の流す涙、涙だけである。否、先生も先輩も皆泣いて居る。

『彦中！偉かつたぞ!! 氣を落すな來年があるぞ!!』

『來年こそは仇を討つて甲子園に出て呉れ——。』

然し此の激勵の言葉も今日を限りの吾等五年生六名に取つては斷腸の思をさせるものであつた。來年のない僕等だ。宿志ならぬまゝ空しく母校を去らなければならぬ僕達だ。前に聞いた先輩の言をそのまゝ、後輩に傳へねばならない僕等だ。

自分等は最早あの校庭で、あの大銀杏の下で野球をする資格がないのだ。もう一日でもよい本校の選手として試合に出たい。而しそれも許されない僕等だ。嗚呼悲しい哉、吾等が夢にだにも忘れなかつたあの甲子園進出も終つて夢となつてしまつたのか。あの炎熱燃ゆるが如き太陽の下の汗涙の猛烈な夏季練習も唯の空しき望であつたのか。

此の吾々五年生の愁然たる姿を見て四年生以下の選手達は皆男泣きに泣きながら誓つてくれるのだつた。

段を完全に踏みしめた吾々は傳へ聞く京洛の強豪、平安に向つて猛突を約されてゐる。

嗚呼我等の若人に榮光あれ。

敗

戰

五年 上杉 襄 司

試合終了のサイレンは悲しげに響き渡つた。三壘側ベンチでは勝誇つた平安軍の歡聲がドツと擧つた。それにひきかへて本校のベンチでは一同默然として誰一人聲を發する者がない皆うつ向いて居る。自分はベンチの一隅に坐りこんで一人顔をふせた。選手間から泣聲が聞えて來た。

『彦中よくやつて呉れた。御禮を言ふぞ。』フアンの誰かから同情の聲がきこえた。私はもうたまらなくなつた。今まで熱くなつて居た目から涙がポロ／＼流れて來た。

『畜生！何故負けたのか、あれ程ベストを盡したのに。』最初に胸にピンと來たのはこれだつた。勿論吾々の技術は彼に比較すれば残念ながら一步を譲らねばならない。然し吾々には技を補ふに傳統を誇る彦中スピリット、即ち燃ゆるが如き赤鬼魂がある。吾等はそれを最大の武器として強豪平安に挑戦したのだ。然るに吾等は彼の軍門に降らねばならなかつた。意氣が技に負ける——こんな事は不合理だ。結局神は

『來年こそは仇を討つぞ！ それまで待つて居て呉れ』と。

『有難う、つきとやつて呉れ、來年は死んでも自分等の恨みを晴らして呉れ頼む。』哀願の五年生の心境——。

自分の横に居た二年の菅井が

『オエヤン、來年こそは平安を倒すから見て居て下さい。』と誓つてくれた。自分は彼が羨しく思はれた。彼が幸福であるやうに感じられた。彼はまだ二年だ、彼は尙も四年間野球生活が出来たのだ。あの苦しくて楽しかつた選手生活が出来たのだ。特に慶應の勝川主將から未來を囑望されてゐる彼だ幸福なる菅井よ!!

自分は前途洋々たる新チームの活躍を祈りつつ夕闇せまる中に黙禱するのである。

回顧すれば早五星霜、櫻花爛漫と金亀の御城を彩る陽春四月、私は入校と共に身を野球部に投じた。不束ながらも若冠にし學校の名譽と意氣とを雙肩に擔ひ、青春の意氣と希望とを今日につないだ。

花の春に背き、胡蝶の舞ふ野の風情をも忘れ、或は炎熱燒くが如き炎帝下に流汗淋漓として、將又冷峭身を徹する晩秋に、さては靈峰伊吹の清吹き下す烈風の中に、秋霜に痛められ烈日にやかれて、鋭氣勃々として日々白球を追つたのだ追つて來たのだ。夕陽比叡の峯に沈む比ひ、餘韻弱々と黄昏

を知らず城山の鐘聲を聞きつゝ、一切の天地を野球に暮したのだ。

而して其間、或は天我に利せず武運拙く敵前に降服し相抱いて不覺の涙の中にくれ、ある時は臥薪嘗膽以て來るべき日の復讐を誓ふの悲壯なる心を味つた。又或は榮冠を獲得して心ゆくまで凱歌を奏したその一つ一つが今私の腦裏に刻まれてゐる。私の彦中生活と野球生活、それは斷じて私の一生一場の夢ではない。それにしても今夏、一路甲子園原頭を期して、平安に敗亡したことは、心の髓に蝕ひ入る遺憾である。

### 京津大會對八商戰を顧みて

五年 川村 徳治

全國中等學校優勝野球大會は滋賀縣豫選の名の下に當縣下に於ても七月二十五日より例年の如く綠ヶ丘原頭で華々しく開かれた。

吾等は七月十日より慶應から勝川、九里、河瀬の三氏を招聘し、十日餘に互を合宿猛練習を續けて來た。そして今や部員一同は張り切ればかりの元氣と、意氣と、自信を以て戰に臨んだ。

第一回戰は不戰一勝。第二回戰は虎姫中學。10 A 對りにて軽く之を一蹴した吾等は準優勝戰に多年の宿敵八幡商業と見

あの熱烈なる推戴式に於けるわが彦中七百の健兒の激勵、應援歌を憶ふてはたゞの無念の齒齧をするばかりである。

愈々ラストインニングだ。もう泣いても笑つてもこの一回だけだ。敵の得意氣なセンチに引きかへて我がベンチには一派悲壯の氣が流れた。

先づトツプバッター森田四球。私の安打で一二壘となる。私は太田と走者を代りファストコーチャーになる。遂にチャンス到來だ。吾がベンチは總立ちとなり試合の経過を見守る。然しこれも瞬間だつた。敵の卑劣なる行爲により森田二壘で刺され、折角のチャンスもツンナウト、ランナーファストとなつてしまつた。あゝ運の悪い時はどこまでも悪いものだ。と半ば失望を感じながら又もベンチを見れば一時の歡びは去り選手、コーチャー、先生に至るまで一味不安に包まれた面持だ。

あゝ!!! 到々駄目かなあ—— あゝ——

最早や覺悟を決めたとは云へ、あまりにも悲惨だつたこの一戰を思ふに悲しくしてしやうがなかつた。

彦中の意氣と名譽とを荷つて起てる吾等が斯様な不様で如何て七百の健兒に會はず顔があらう。如何て天下の一中としての面目を保つ事が出來やう。と思へば私の胸は張り裂けんばかりであつた。

える事となつた。破竹の勢にある吾等は「八商何者ぞ」の意氣物凄く起つた。當日の苦戰を誰が豫期したらうか。蓋しそれも無理は無い。當縣下では勿論更に京津に於ても有力なる優勝候補として自他共に許してゐたのだから。

而し試合が始ると敵もさるもの打倒彦中の意氣凄く一分の隙さへ見出せない。のみならず戦前の豫想を裏切つて四回には3對2と敵のアヘッドとなる。當然勝ち得るものと思つてゐたこの戰が却つて敵の有利となり、味方の不利となつたことを吾等は豫像だにもしなかつた。嗚呼若しこのまゝで九回が終つたなら僕等は一体さうすればよいのだ。而も、運命の神は容易に吾等に微笑まうとはしなかつた。

五回……六回……七回……八回と無得点。  
あゝ!! 無念。何故もう一点取る事が出來ないのだらうか。回が重なるにつれて私は殘念で堪らなかつた。

噫! これで僕等の野球生活も終るのか。あの樂しかりし野球生活も今日限りか。何の爲に今日迄あの様な猛練習をやつて來たのだらう。あの寒風膽を射す冬の日、あの炎熱燃ゆるが如き夏の日の猛練習も、すべては過去の汚名を雪がんものと互に勵まし、互に助合つて只管榮冠に向つて精進して來た涙ぐまじき選手のわれわれである。吾等は甲子園出場を誓ひながら、斯る試合で惨敗を喫し、又しても昨年の如き苦杯をなめる事は到底我慢がしきれないのだ。

然し丁度この時——實に運命の神の祝福。場面の急變化。ラストバッター若林の遊撃ゴロを敵はハンブルして再び走者一二壘となる。すると今まで鳴を靜めてゐた彦中應援團は待つてゐたかの様に俄に騒ぎ出した。バッターは一番馬場。何といふ好打順だらう!

私はコーチャーボックスより知らず、馬場の一打を神に祈つたのだつた。「窮鼠却つて猫を噛む」最早や彦中ナインは必死の覺悟物凄く満面には殺氣さへ浮べて必勝の氣をありありと讀みとる事が出來た。

愈々決勝の球は1—2の後投せられた。馬場がさうしてこの好球を見送すものぞ「球も碎けよ。」「バツイも折れよ。」とばかり渾身の力を込めて一打すれば、球は「カーン」と快音と共に碧空をグン／＼と伸び左中間深くたゞきこまれた敵が懸命に球を追ふ。

太田先づ生還。若林も續いて長驅本壘にすべり込む。球審の手が低く地に平行に伸ばされた。ホームイン。同時にサイレンが響き渡る。

嗚呼々々、僕等は勝つたのだ。  
勝つたのだ。

遂に勝つたのだ。  
彦中應援團が狂喜の如く亂舞する。先生達、先輩がベンチに駆け込んでこられる。

『萬感胸に滿つ。』今や誰も彼も、選手と言はず先生と言はず互に抱き合つて感泣するのみ……

嗚呼!!! 何たる快勝ぞ!!

昭和十一年七月二十七日彦中對八商。4 A 對 B

此の日こそ、此の戦こそ後の對平安戰と共に私の全生涯を通じて最も思出深き野球生活の麗はしい一頁として永遠に私の胸に刻みこまれる事であらう。

## 北海道に就いて

五年 南向誠 誦

私の郷地は北海道である。私は内地の人が北海道を知らな過ぎることを、こちらへ来て思つた。人の共通性として自分の故郷を愛せない者は誰一人もない、又、誰でも自分の郷土をこの所よりも一番善く云ひたがる、郷土を愛するが故にだ。そして一寸でも自分の郷土を知つてゐて呉れる人にと或る特別な感じのする、したしさがわいてくるものだ。それで私は、人並に、ほんとうは、内地の人々の北海道に對する誤てる考へを打破して戴きたいものだ、長い間思つてゐた北海道アイヌや熊のゐる、と云ふ具合に、北海道の唯一の豫備智識として、内地人はアイヌと熊として、依然我が故郷を未開の地であり、且つ文化の一步後れた所だと思はれて

少女の憧れトラピスト修道院。等々枚擧に遑がない。家庭内の設備などはよく整つてゐて、或る人の實驗談によると、内地の方が冬などはかへつて寒し、又北海道は氣樂でい、

もう内地なごには歸らんと云つてゐるが、一度此北海道に住ひした人は内地なごには歸りたくないと云ふのは、いかに北海道の住みよいかを物語つてゐるのだ。熊なごも見たいと思つたつて今日ではなか／＼見られなくなつた。今は實に樂土と化して、未開發の地が多くの移住民をまつてゐる。樂土!我等若人は、我が郷土の實狀に暗い内地の人に正しく北海道を意識せしむる事が第一の急務だと思ふ。北海道!そこには我等を待つ大自然がある、樂天地がある。一度てい、誤てる内地人にこの北海道を見せたい。そして文化北漸の第一線に立つ北海道を理解してもらひたい。

## 郷土藝術

五年 上田純孝

上弦の月が頭上高く稍斜に玲瓏として光つてゐる。時々月光は其の面を走り去る叢雲に恰も寫眞のピントを合す如く暗くなつたり、或は明白となつて物の影を地上に印してゐる。風も少い夏らしい夜である。私は舊友に誘はれて少しは嚴格な學窓生活から脱けて輕いゆかたに暑さを忘れようと銀河を

ゐる。これが悲しくも、ましき現實である。相當の教育を受けた人々でさへも今尙北海道に對して一切盲目である。こんな人達に一目現代の北海道を見せてやりたい。一步足を此の別天地北海道に入れた者は、その想像と現實との余りにも懸隔あるのに驚愕するのである。そして誰一人として北海道讚美を惜しむものがあらうか。世界に誇る青函連絡船にて函館ステーションに上るや、第一番にその壯麗な待合室を見て驚くであらう。更に一驚を喫せしむるは洋風の函館市だ、その堂々たる建築は文化を自慢する内地にも多くはない。北海道の文化は内地人の考へる如き空虚なものではない、文化は東北を飛び越して北海道に來たのである。青年詩人石川啄木は『札幌は詩人が、生に一度は必ずきて見る價值あるところに御座候。四邊の風物何となく外國風にて、風俗も余程内地はなれがし、そして人は皆日本人なるが面白く候はずや。停車場の前通りなるアカシアの並木の下を、行く人、くる人皆緩るやかなる歩み運び居候』と東京に在る知人に報じた。これを内地人札幌觀の全体の聲と見るのに大過なからう事は、或る書で見た。詩の都札幌があり、原始そのまゝの阿寒岳、大雪山、旅行の疲れを慰むる温泉があり、湯の川、登別、定山溪、大陸的な石狩平原、大農的農場、詩的な牧場、冬期のスポーツで有名なスキー、スケートの好適地は各地にある。登山また然り、海水浴場又しかり、五月には清楚な姿の鈴蘭、

仰ぎ見ては遠い昔のロマンチックなギリシャ物語に想を運ばせつ、心樂しく隣村の盆踊の見物にやつて來た。

そこでは私達は其の村に入るや否や田舎の夜の静けさを破つてかん高い音響に見舞はれた。それは言ふまでもなく懐しい『ヨイヤマカサ』の踊るリズムの掛聲であつた。

踊り場についた私は田舎にまさる人込に驚かされた。踊つてゐる。踊つてゐる。老も若きも真中の音頭棚より近江なまゝりも面白く歌ひ出す音頭に合して男女の別なく踊り狂つてゐるのである。中でも注目的となつたのは七十の坂をこえたかと思はれる老女が物をさぐるが如き手つきで歳を忘れてさす手引く手に踊り狂つてゐる姿であつた。魅せられた私は唯呆然として場内の壯絶さを見守つてゐた。

江州踊、江州踊これこそ近江の郷土藝術の本格的原始的なものであらう。假令それが單調平凡なものであるとは云へそこには獨特の音調を有する音頭があり、之に合して田畑の勤勞を片時なりともわすれ夜の更け行くに氣附かず踊り廻る素朴な踊が演ぜられるそれこそ農村生活を主体とする近江人にとつてよき運動であり娛樂であり、そこに踊りの名以上にある貴さと豊饒の村の平和さがみなぎつてゐる。私は此の江州人の生活によく合致した郷土趣味の横溢し氾濫せる江州踊が永遠に盛んに保存されてよいものだと思つた。

月は落ちかゝる。社頭の梢は高い。夜は更けて踊は益々佳

境に入るかのやうに、村人の数をつくして『ヨイトヨヤマカ』の掛聲は張り上げられる。私は幸福そのもの、如きこの老若男女の群集の頭上に散華でもしたい位に思つた。

## 番場の瀧路

五年 川 森 義 夫

夏の暑い日だ。頭髮も燃焼しさうな光を陽は燦々と降注いでゐる。樹木も萎れて自然の炎王の前には鋒を投げ出して、額を傾けてゐる。不圖番場に瀧のあることを想出して歩を番場へ運んだ。靈仙の頂峰の上に白雲が漂ふてゐる。コバルトに澄んだ大空が神秘と謎を奥く深く藏してひろがつてゐる。星霜茲に一世紀。追想を彼方に放てば、有爲轉變まこと盡ならずその名も昔し中仙道の詩歌にも文にも詠まれた番場の宿として旅人の一日の旅衣の疲れを慰藉し、旅寝の夢路を辿らせ、空腹の旅人に舌鼓を打はせ、咽喉の渴きを濕はし、明れば鷄鳴に一度曙の静さを破られて驛馬の嘶きとなる朝戸出の活況を呈した情景も今は時世の潮流には逆ふ道も知らず、すべては流れ／＼と水泡と消え失せてしまつて山間の寒村となり終つてしまつた。家の軒庇、建方、屋並、これらは嘗つては何々何々といふ旅籠屋であつたのだ。古錆びれた中に往昔の趣情が偲ばれて懐しい。村はずれに出る藁葺の屋根に苔の

である。歩は慣性的に一步々々稍々峻しくなつた。傾斜を登つて行く。幸に、雜木で日光は遮れて日蔭の徑が續く。蜻蛉が悠々と翔んでゐる。蝶が山花の蜜に陶醉してゐる。急に明るみに出た。亦暑くなつたと思ふ利那腫に寫つたものは太湖の眺めである。繪巻ものを繰展げるやうに次々に見える。竹生島があれだ。多景島が浮いてゐる。島の左の方に小舟が三つ四つ、波は静かだ。波頭が見えない。湖西の連峰が起伏の小波を打つてゐる。比良はあれだらうか、唯自分の心が自然の中に融合して行くのを感じる。麓の方には杉松が杳丈を競うてゐる。あの杉、探幽の繪に出る杉だ。暫し壯觀にみとれる。瀧まで何位あるのだらうか、歩は亦動き始める。道傍には冬期には重寶な橋が一つ大の字になつて睡眠してゐる。季節に早い毬栗が頭髮を青く染めて秋を待つてゐる。と溪流が鼓膜にさら／＼と韻律を響かせ来た。瀧の音だらうか、立止つて聽入る歩毎に大きく鼓膜を振動する。瀧だなど直覺すると、神髓が運動神經に命じたのか、歩は急に速くなる。瀧へ来た。造化の神か大山祇命か、自然の手に御造り給ひし高さ十余尺幅余尺の瀑布が滔々と奔湍を岩角に叩きつけてゐる。水沫四散し岩石の上を流れてゐる。傍に八代龍王大神と記した木碑が立てられてゐる。何だか瀧そのものが自然の威大を背景に座して私をぢつと見つめてゐるやうだ。

生えた水車小屋がある。二十世紀をも知らないかの水車が長閑に旋轉してゐる。雜草が道の半ばまでも蔽ひ生えてゐる。これが磨針峠を越えて、鳥居本に通ずる中仙道なのだ。だの今は米原を經へて、自動車は砂塵の煙を後に殘して滑走してゆく。此にも浮世の變遷の場面を窺はせてゐる。徑の兩側に杉の巨木が肩を並べてゐる。これらの老木はいにし昔のことは總べて知り盡してゐるであらう。併し非情の植物は今私に何にも話して呉れない。私の腦裡には深編笠に面を覆う往く武士の姿や、擦り切れた草鞋をひきひき往く浮浪人の姿や、杖を頼りに市女笠を手に握りとぼ／＼往く巡禮の姿や、さては大名の行列に首を地につけてゐる百姓の姿なきが次々と浮んで来る。回顧すれば六百年の昔、京都探題將軍北條時時が四百餘名の將卒と共に六波羅より逃げ延びて、此地を浮世の最後とて冥土に旅立つた史上の哀れが誘つてくる。今は蓮華寺の裏山に遺恨の風に包まれて、風雨雪霜に洒らされて墓石に苔を古めかし、山襲ふ嵐をば淨界の樂と聽き入り永眠してゐるのであるか——。瀧へ行く徑はすぐわかつた。傾斜の緩い小徑を登つて行く、汗はたら／＼肌の上を流れては手拭一筋に拭ききれない。山を音楽會場とする蟬の演奏が今甞である。何と長い交響樂だ。寸暇も絶えることがない。團栗の木に兜蟲と黄金蟲が戯むれてゐる。雜草の茂みの中で蝻嘶響蟲が獨唱を擅にしてゐる。夏の山の自然の至樂園そのもの

## 天の川の螢

五年 國 島 惠 祐

けに奇蹟とやいふべき、絶景とやいふべし。草叢の間を音もなく流る、川の此方彼方に限りなく螢の飛び交ひたるその様は、つたなき筆、まづしき言葉にては言ひ表し難き風情、又なき美はしの眺めなり。夏草の濃きが中に里川の淵をなせるあたりに、夜空にと一群又一群、或る時は晝をもあざむくかの光を放ち明滅する様はほの暗き天の川畔を百八の龍燈と彩して一きは美しくいろざりぬ。

右と左に川をはさみて細き道あり。點々として立並ぶ雪洞の灯影もなつかしく、さながらに繪巻を見るが如き心地す。絶間なく打揚ぐる仕掛煙火にも一入の風情をそへて、賑はしき人波にもまれつゝ、川に添うて徜徉するもうれし。危く踏まんとする草叢の中に一つの光認めては螢狩の心にかへりてつと我が手に取り上げ。あえかなるこの生きもの、なきてかく明滅の光を具するや。されき捕獲禁止の聲、ツト頭をかすめたれば思はず。我が手を開きて放ちやりぬ。その螢いつかた目がけて飛び去りしか。川風にゆれていつかその姿はむらがる螢の中にまぎれぬ。

思へば去りにし七月六日の夜及び十七日の夜、谷澤君、西

堀君と三人して捕獲禁止外の地に出て一夜に一百數十匹といふ夥しき螢を狩りける日の面白さ、言の葉につくしがたく、

今宵は天の川捕獲禁止の域なれば、螢こそ群れとびてめてたし。或は川の面低く群と放れし螢、いつか人垣の中に散々たり。牀几にいこへる幼子の『螢とれ』とて無心にねだるもいぢらしく。或は行き交ひし學生の制服の上の一つおりて光りてあるを、そを知りてか知らずでか進みゆくも風情ゆたかなり。げに天の川幾萬の螢、幾百人の行樂、夏の夜の眺めつきず賑ひつきず所々に散在する人、家よりは三絃の音につれて、人のさんざめく聲も夜空を破りて聞えくる。明け放たれし部屋の明るさ螢火の青さ、影の川面にうつる清けさ、心なしか今宵は月の影もなく只星のあるかなきかの小さき姿散在するのみ。けに天の川行けきも盡きぬ螢の眺、美しの夏の里人の心思盡きざるうちにやをら歸路にと橋上に立てば折柄の川風にそより冷たくほゝをなでらるゝ。ハツとして初めて長き昇奮より我に返りぬ。あはれ我生れて十八年未だかゝる螢の群居を見ず、今夏未知の街にてあれきこの美觀をほしいまゝにして感興特に加はりぬ。なつかしくも思ひ出多き高貴の地なるかな。午後九時半名残を惜み、汽車に投じてかへりぬ。手に手に螢籠を家苞にせる乗客多し。螢狩列車ともいふべく時にあひて面白くなん。

## その日

五年 野瀬 茂

その日、僕は學校を終つてから商用で百貫近くの荷物をオートバイ(三輪車)に積んで長濱へ行つた。

オートバイに乗つて思ひ切り走るのには實に氣持のよいものだ。二三年頃はよく中仙道や朝鮮人街道を疾走した。今は小型自動車法が制定され又そんな暇もないけれど。

この日も中仙道を通つて米原から長濱へ行つたのだつた。實はその歸り途である。午後五時頃長濱を出た。走る走るさん／＼飛ばした。眞夏ではあるが涼しい風が頭、頸、頬、胸と體一面を掠めて後へ飛び去る。爆音も勇ましく北陸道を南へ、緑、緑、緑、山も緑、野も緑、稻は青々と成長してその葉先をそよ風に吹かれてゐる。百姓さんが田の草を取つてゐる。道を通る人は皆後へ飛んで行く。電柱も後へ消えて行く。視界は次々とその景色が變つて行く。實に愉快でたまらない。まるで颯爽と騎馬にまたがる征服者の様だ。

「おや？」

丁度天の川の手前まで来た時突然エンジンが止つた。下りて方々見るが何處に故障を生じたのかさつぱりわからない。ガソリンも充分ある「おかしいなあ、電氣はさうもないだらう

かと思つて何けなく調べるとズバークが出ない。「さてはこゝかな」となほよ調べて見るとマグネットのアマチュア(發電子)が廻轉しない。

「これが廻らなけりや問題にならない、癪だなあ」しかし何うも仕方がない。直さなければならぬ。そこでエンジンとマグネットとを連結してあるケースをはずして見ると、こはそも如何にこは如何に、天なるかな命なるかな、チェンがぶつりと切れてゐる。これは意外だ。自轉車のチェンでもめつたに切れない。まさかこんなものが切れようと代りなんか持つて居ない。生憎デョイント(チェンの一部をこれで連結して取はずしを便利にする)もない。

あゝ、えらい事ちつや。全身は汗でづつくりだ。

夏の太陽もだん／＼と西の山に傾いて、あたりは刻々に薄暗くなつて来る。先つき途中でさん／＼抜いて来た自轉車等がこちらをいやな目付で見ながら通り過ぎて行く。折から威勢よくトラックが埃を上げて走り去つた。

つい先程迄愉快に走つてゐたものがこんな姿とならうとは想像もつかないことだ。この百貫以上もある圖體のオートバイがその活動力を失つてしまつた時のこの姿の惨さよ。

まさかこれを引つばつて三里以上も家まで歸るわけには行かない。といつて道の真中に捨て、おくわけにも行かない。とにかく人家のある所まで引つばつて行かうと、さて引つば

つて見ると中々重い。あれ程物凄いスピードで走つてゐたのにこんな姿にならうとはなあ。僕はほんとなさけなくなつた。まだその上人家まで行かうとするとこの天の川の堤を通らねばならない。それには坂がある。この坂がこんな大きなものを引つばつて登れるだらうか。往きは清く美しく澄んだその流を右に見下してすつと迂り下りたこの坂ではないか。本當に思つても忌々しい。しかし仕方がない、出来るだけはやつて見よう。と一歩々々登り出した。

僕の體重の何倍あるだらうこの車は「うん／＼」言ひながら少しづつ登る。一寸行つてはサイドブレーキをかけて一息吸ふ。萬身の力をこめて又一押しする。ブレーキをかけて休むかくする事幾度。まだ初めの間はそれでも少しづつ、は進んだしかし七八分目まで來るともうさうしても上らない一寸力をゆるますとすぐ下つて行く。少しも油斷出来ない。おまけに道が又頗る悪い。道路修繕中だ。

こんなすばらしい機械を發明した人間の頭腦は本當に偉大なものではあるが、一旦故障が出來て最悪のコンディションに立つた時の人間の微力も又實にはかないものではないか。

「あゝ、さうしても駄目かなあ。駄目なら誰かに手傳つてもらはるか？ いやだなあ、でも仕方がない恥しいけれど」

日はとつぷりと暮れた。あの美しい夕焼の空も何時の間にか灰色に變つてゐる。頭上を不氣味な鳴聲をして鳥が飛ん

で行つた。「誰か来て押してくれないかなあ」と待つてゐるこの僕の心中が察してほしい。

折よく来た人に聲をかけた。

「あの、すみませんが、一寸後を押していただいけませんでしょうか。」

顔はつきり見えないけれど頭を下げて頼んで見る。がその人は一向返事もせずに通り返り過ぎて行つた。「あゝ、聞えんのかなあ。聞えたら押してくればいゝのに。ひよつとしたら聲がしら。」といささか腹立たしく思はれた。

しばらくすると自轉車の灯が見えて来た。「仕方がない。もう一度頼んでみよう。」

「すみませんが一寸手傳つていただけませんか。」

とその自轉車が前に来た時聲をかけた。

「何を手傳ふんだ？馬鹿ぬかすな。おらあ人の事なんかしておられねえ、急けしいんでえ。」

とぎなつて通り去つた。

「これは又いやに品の悪い者に頼んだなあ。さては今の酒でものんでゐる土方の親方かしら。暗いんで顔がわからなかつたが。」

あゝ。だが、この人に限らず他人は皆こんなものだ。人は利己的な動物だ。自分の爲にもならない事には手を出さない頼んでもしてくれないではないか。人なんか頼りにならない

「君、何してゐるんだ。こんな所で？」

と誰かが聲をかけた。「はつ」と我に返つて

「何んです」と聞き返す。

「何んですぢやないよ、こんな所で何うしたんだ。」

とその男は云ふ。

「何にをしたつて、僕は今夜は野宿です」

と何故かこんな事を云つた。

「野宿？戯談じやないよ。おや、オートバイぢやないかこれは。」

「ええ」

側からうら若い女の聲がする「おや」と僕は驚いた。周りが暗いのではつきりわからなかつたが、男だけかと思つたら二人連ぢやないのか。

「いや、すみません。實はオートバイが故障をして、こゝまで引つぱつて来たのですが、こゝから上らないんです」

「何んだ、それならさうと云へばよいのに。」

「ねえ、あなた、ぢや一寸押して上げませうよ。」

と彼女が言ふ。

「うん、押してやつてもよいけれど。」

と彼は答へた。

「ああ、すみません。ではお二人で一寸と押して下さい。」と僕はとうとう弱音を吹いたわけではないけれど頼んだ。こ

ものだ。僕はこの時初めて一般社會が如何に薄情なものかといふ事を知つた。現在僕等の生活してゐる學校の様なこんな情愛のこもつた社會とは社會が全く違ふのだ。

「他人に絶対に依頼してはならない」と云ふ事を僕はしみじみと心の奥まで印せられたのである。

「仕方がない。天命だ。萬事窮す。今夜はこゝで野宿だ。幸むしろが一枚ある。これをかむつて一夜を明かさう。これも人生のよい一つの經驗だ」と決心したのである。

空は一面砂を撒いた様に星が輝いてゐる。頭上には銀河がずつと半天を限つてゐる。北斗七星も見える。あれは北極星だ。あつ、さう云へば今晚は七夕の夜ではないか。牽牛星はされだらう。織女星は何處だらう。今夜はこの天の川に鵲に橋を架けてもらつて一年振りに相會ふ星祭の日だつた。

天上は歡樂の天の川、地上は遭難のこの天の川、何たる奇遇だ。天の川の清流に天の川が映つてゐる。今まで浮世の無情につくつくいやになつた僕の心も何か躍る心地に晴れた。じつと空天の星の瞬きに魅せられてゐる。周りの空氣はだん／＼と冷えて来た。夜露も降り始めたのであらう、何んだが眼がしつとりと濕つて来る。折から夜風に土手の竹藪がざわ／＼と揺れた。何んだか近くに墓地があつた様な氣もする。

「ほおー、ほおー」と無氣味に鼻が鳴いた。

の人達なら手傳つてくれると思つたので。

やつと二人の助力を得て堤の上までオートバイは上つた。

「有難うございました。大變御苦勞かけまして」

と思はず感謝の言葉が口から出た。いや實際心から感謝したのだ。

「本當にすみませんでした」と僕は重ねて心易だてに「御散歩ですか、天の川の堤を。今夜は七夕ですなえ」とつい言つてしまつた。

「うん」と何ちらが言つたのか、多分二人が一緒に言つたのだらう。二人は互に見合はせてにつこりとしたらしい。

僕はそこでお禮を言つて人家の方へ引つぱつて行く。そこに自轉車屋があるのを知つて居たので一晩預けてもらふ様に頼んだ。それでも一言で聞入れて呉れた。うれしかつた。

僕はほつとした。やれ／＼と思つた。やはりこの情ない世の中でも親切な人達がないでもないのだ。いや、これは神様が僕を救つて下さつたのかも知れない。とにかく僕はこれ程困まつた時、従つて又此れ程嬉しかつた時は無かつた。

僕はそこから米原驛に向つてとぼ／＼と夜道を歩いた。しばらく行くと驛が見えて来た。

「あ、何んと美しい事だらう。夜の米原驛は」  
晝の米原驛は何うだ。機關車の吐く煙、機關庫から出る煙、その煙で後の山まで眞黒だ。松の緑もあつたものぢやない。



冬ならあの美しい無垢の雪もさぞ、黒くされる事だらう。しかしさうだらう夜の景色は。赤、青、緑、紫、黄、橙と色々な色の電燈が点在し又それが點滅して色々に變る。としてその間を美しくい夜行列車が通り抜けて行く。僕は米原驛から乗車して歸途を急いだ。汽車は夏の夜の湖岸を走つてゐた。

あ　　る　　日

五年 西島 雅弼

此處は長濱、豊公園の夜は萬葉の櫻雲の中に搖曳して、人の波、櫻、櫻のさんざめき。思つても見よ、冷いそして陰鬱な灰色の冬の眠から呼びさまされた人間の春の行樂、一團又一團、櫻の下には歡樂の泉が湧く。人の心も櫻と同じく一度にはつと浮き立つ、その宵である。

ペンくくくと、稚い三味線の音に黄色い聲を張り上げて青白い顔をした少女が、絢爛と咲き誇る櫻の木の下を流してゐた。薄赤い雪洞の光が、かすかに彼女の頬を照らしてゐた歌ひかけた歌をお客にことはられた彼女は、淋しい笑——私にはさう思へた——を口元に浮べて、又他の櫻の下の一團へと行つた。私は其の彼女の淋しい笑の中に、哀れな人の子の

か。その少女。旅の踊子。

日　記　か　ら

五年 漢 正 印

病癒えし日——。

かりそめの病から三週間餘も缺席してしまつた。それは、五月の末より六月の中頃迄。

白々しい私の葬儀のことさへ考へる日があつた。

墓石の下に眠つて居る私に涙と共に檜の華をたむけて呉れる老い衰へた母の姿を想像することさへもあつた。

面やつれた父が私の亡き後の相續者を苦心慘澹と探して居る横顔がまぶたに描かれた。

朝禮の後で校長先生が私の死亡を披露せられる光景が走馬燈の様に目の前を走り去つた。

母はふさぎ切つて居る自分の心を慰める氣か、縁側の障子を開けて呉れた。床に着いた時より一層若葉は燃え出て居るさん／＼と若葉の上に降つて居る初夏の陽は衰弱し切つた私の目には痛かつた。目を掩はざるを得なかつた。若葉を見るとき、焦燥し切つた心を一層かきむしられた。

病みて臥す目には眩ゆき若葉哉

一日の内て私にとつて最も苦痛な時は夕闇の迫つた時である

苦勞を見出すのだつた。

其の翌日——午後、昨日の踊子が川のためとに悄然と立つてゐた。よく見ると未だ十四、五の彼女は三味線を小脇にかゝへ、人絹の着物の裾を高く端折り、橙色の色あせた帯をお大鼓に結び、赤茶けた油氣のない髪を亂れた鬢の後れ毛が淺黒い頬に垂れかゝつてゐた。何處となくやる瀬ない云ひ知れぬ憂が顔に漂よつてゐるかの様、そしてじつと流れ行く川の水に見入つてゐた。川面には暖い春の光が、小刻みに刻まれ滑らかなリズムを立て、ゐたが——お、なんと痛ましい彼女の姿なんだらう!! 若い身空で知らぬ他國へ旅の身で、細い彼女の頬には、人生の苦勞にもまれて自然に育つた乙女子の様な光澤も見られない。然し世の人達は余りにも、斯くの如き者を賤しむ且つ顧みない。親があるのか、故郷は何處かと尋ねてやりたい位である。只空虚になつた彼女の心は川面に浮ぶ故郷の追憶に悲しい一時を過してゐるのであらうか。私の胸には不圖藤村の『椰子の實』の詩を思はせた。

「われもまた渚を枕　孤身の浮寝の旅ぞ

實をとりて胸にあつれば　新なり流離の憂

海の日沈むを見れば　激り落つ異郷の涙

彼女はそこまでの深い感傷に居るかは私は知らない、が、花が散つたら又何處へ行くのだらう。水の上の浮草の様に昨日は東今日は西、うらぶれて次々と旅を渡り歩くのであらう

。寂しく悲しくそのまゝ、涙して枕を濡らすことが往々あつた。今日も亦夕暮が來た。庭の隅にある早咲きのあささいの花が一輪、ポツカリと——恰も一人寂しく臥して居る私の様に——夕暗に浮き出て居た。

あぢさいは我が心から夕まぐれ。

八月十四日

父と私とは毎年十四日に墓參するのが通例である。其の理由は、十五日には歸省した人々が多數盆禮に來るので、一日早めて墓參すること、なつてゐる。

共同墓地ではなく私の家の墓は別に山の麓にある。B家の墓も綺麗に掃除され、ひつそりと静まりかへつて居る。

未だ墓參の人は一人も居ない。従つて人聲一ツ聞えない。唯蟬ばかりが今こそ我が世とばかり無心に鳴き續けて居る。心靜かに一ツツ華を立て、行く。ジーツと體中から汗が滲んで出る。父は靜かに先程から讀經し續けて居る。其の後で『私で七代目、八代目か九代目の人間が私の墓に華を立てるだらうこの様に——』等と考へて見た。線香は大分煙つて先は白い灰となつて大分曲つて居る。その白い灰がポツリ、音もなく落ちた。然し大きな音がした様に感じられた、あたりが餘りに靜かだ——。

線香の灰の落ちける墓前かな。

陽は傾きかけては居たが、共同墓地へ廻り、無縁墓を訪れた心ばかりの華を手向て不運な人々の爲め、冥福を祈つた。そしてその名も知らぬ、顔も知らぬ故人の靈に私は冥目合掌之を久しくした。静かに目を開いた。いつの間に来たのかとんぼが一匹、拜石の一角におもむろにとまつて居る。——とんぼもまゝ冥福を祈つて居るのであらうか。動くものは一つとしてない。聞えるものは蟬の聲のみ、西陽受けとんぼとまれり無縁塚。

### 秋の夜の樂しみ

五年 湯本信良

一、レコード

私の毎日の唯一の樂しみはレコードをかける事なんです。樂しい夕飯後、私は二階の書齋へ歸ると獨りレコードをかけます。併しこんな時なすすぐ小さい弟がばた／＼とかけ上つて来て、せつかくしみ／＼と静かな氣分で聞きたいと思つてゐる私の望をめちや／＼と壊してしまひます。弟にせよ可愛い、童謡なき聞き度いのは勿論ですが、今の私は弟の氣邪氣な童心よりも自分一人で聞き度いと言ふ欲望の方が大きいから、すぐ腹立たしさが先に立つてちよつと弟が話しかける

ムを見る事が好きである。私の寂しい時。私の悲しい時、慰さめて呉れるのはアルバムである。私の恩師、私の従兄、友達、兄弟、父母、様々の寫眞が私の手によつて一枚一枚丹念に貼られてゆく。こんな時には私はもう全く世の中のあらゆる事を忘れて一所懸命である。併し寫眞を貼る事は仲々容易ではない。せつかく美しく貼れたと思つて得意然として手を離すと糊がくっ／＼かかないで反つてしまつたり、あまりはなれるからと無暗に抑へつけるとせつかくの美しい寫眞が糊で眞黒になつたりする。こんな苦痛がある一方又樂しきがあるから面白い。私は寫眞は將來の思ひ出の種となるし又己が慰みともなるかちととも良いと思ふ。此のアルバムが様々の寫眞で埋めつくされる頃には自分は幾つ位になつてゐるだらうか。こうして苦心して貼つた中學生時代の自分を思ひ起すこともあらう。かなな事を考へてゐると私は夜の更けるのも忘れてしまふ。そして淡い電燈の下で手を眞黒にしながら夢中になつてゐる自分が愉快でならない。秋の風もが笑つてゐる様な秋の夜更け。

### 風

五年 原田修一

「春の風」——谷間の雪が消え始める頃、新しい春の芽出

と「やかましいなあ、静かに聞いてなさい!!」なき、吐つて見たくなるのです。静かな夜、しかも弟さへ上つて來ない秋の夜、ぐる／＼と廻轉する圓盤を見つめてゐると妙に心がしめつぽくなり、そして様々の思案が私の腦裡を掠めて走馬燈の様にかけめぐります。あゝこんな美しい音が何處から流れ出るのだらう。目に見えぬ程のこんな細い溝を針が小さく大きく振動して音を發する？ さうしてだらう。あのサウンドボックスはさうして考へついたらうか。エヂソンはさんな頭を有つてゐたのだらう。私にはさうしても解らない。しかもエヂソンは聾だつたと言ふのに。すべてが謎の様に思はれる神秘であるかの如くに思はれる。私はレコードをかける時何事もこんな事を考へます。余り夢中になつてゐると自分で何をかけてゐるのかさへ知らなかつたり、もう終つてゐるのに氣づかなかつたりする事も度々あります。椅にもたれて子守唄なきを聞いてゐると幼なかつた昔が懐かしくなつてもう一度あの頃の自分になつて見たいと馬鹿けた考を起さない事もありません。

二、アルバム

秋の夜更、淡い電燈が静かな光を投げかけて、空には月も無く黒い雲が墨を流した様な秋の夜更け、……私は明日の課題を終へると、整理もしないでバラ／＼にして居た寫眞をアルバムに貼らうと思つて取り出した。私は自分のアルバムを呼びかける春風が、冬の深い眠りから覺めようとして居る寢れ果てた自然の肌をやはらかく吹き撫でてゆく。春の風には慈母のやさしさがある。かうした草花を暖い夢に結んでくれるこの春風は、人の心をもその長い凝縮から解いてくれる。人は春風を一ぱい胸に吸つて新しい春の力を湧き出す。春の風は人生の悦びの譜を奏でる。

「夏の風」——眞白い帆一ぱいに順風を孕んで青い海を心行くばかり走るヨット。夏の風は愉快な風だ。元氣な風だ。遠山の入道雲のやうに元氣一ぱいのそして潑刺とした風だ。又夏の夕べの涼風も人々の心を暖らずには置かない。河鹿鳴く河岸に佇みながら、颯々たる夜風を肌を受ける時、私達の心は烈しい炎暑との闘ひをも打ち忘れたかの様に、爽快な感じに満たされる。そして幽谷から吹き送られるのかと思はれるこの清風に、感謝の念をさへ捧げる。

「秋の風」——秋の風枕を吹けば放浪の子なり母の黒髪と黄色に死んだ木の葉を無情に奪ひ去つて行く秋の風は、人間の小さい心にも、しみじみとした淋しさをもたらす。よしそれが白髪の母ならずとも、冷々とする床に、カサカサと落葉さす秋風を聞いては、遠い旅の子を思ふであらう。又蘆花は「風は過ぎ行く人生の聲なり」と云つて居る。さなだに寂寥の感に打たれて居る晩秋の頃、飄然として吹き來る風は滅亡を嘆く悲哀の曲を奏で、居るかのやうだ。ヂットこの音に耳

を傾けてその深い吐息を聴く時、私達は淋しい、はかない人生の旅と思ひ較べて、深い深い物思ひに沈まずにはをられない。

『冬の風』—— 寒を含んだ北風が陋屋の板壁を叩きつける時には、我々はそこにすさまじいばかりの自然が人類へと挑戦してゐる姿を感じる。今迄重壓の鐵鎖に喘いでゐた者の反逆である。圍爐裡に蹲りながら、血を吐く様なその怒號にちつと耳をすましてゐる人間、自然の前には路傍の草花と同じ弱い生物である自分を冬の風に感じる。氷雨の風。雪おこしの風、夜空にヒタ叫ぶ冬の風は恐ろしい。

## 立秋の雪

五年 河邊 果

炎熱の日が続いた。しかし屢々沛然として白雨があつた。とかくする中に私達は早長月の空を仰いでゐるのだ。残暑は今尙敵しいが、心を鋭くすれば空行く雲にも、流れ行く水にも秋の忍びよる氣配を感じる。

このや、秋じみた感じの空にも、尙夏の雲の名残がしのばれる。あの『夏雲』碧空に浮ぶ夏雲の自由さうな姿体が！

雲の縁を飾る眩ゆいばかりの光が！  
桐の葉越つに見た空の雲。あ、さうだつた、あの桐の細い

れ希望と歡喜によつて輝いてゐる。孤雲を抱く立秋の空はその懐に夏の夜の星の瞬きを匿し残月の影をも消しコバルトに輝いてゐる。此の秋空の雲の魅力こそ人類の持つ永遠の嘆美であらう。立秋の日は長い…… 日毎に深まり行く田園新秋譜。

『秋は野や山へ。歩めハイタ』と美しく色ざられた觀光協會のポスターが秋の陽光に照つてふと目に入った。大空の孤雲はしづかに古城趾の上高く伸びて行く。

## 夕

## 暮

五ノ一 森 貞 三

『夏は夜。月の頃はさらなり。闇もなほ螢とびがひたる。雨なきの降るさへをか。秋は夕暮。夕日はなごやかにさして』なご頭に浮かべて家を出た。自動車の響。ラヂオの音が耳を突く。堪へ切れない騒音からのがれて土手へ出た。秋と云つても氣候は残暑きびしく晩夏と云つた方が適當だ。宵闇と云ふ黒い暮りに覆はれて森々とねむつてゐる若葉を通して一筋の涼風が頬を掠めて通る。やはり土手だ。あちらこちらに夕涼みの人があるらしいが姿は見えない。夏は夜。秋は夕暮。眞に夏秋にかけての極苦の世界は夜が一刻千金なのである。『三伏の候誠に極苦の世界と爲す。但味爽に起れば群動

枝には小さな可愛い、蟬がとまつてゐるのだつたと私は驚く。濱邊の夏、雲の果なき魅力に引入られつ、果しなきあの大空を見るのだ私の癖だつた。あの大空を行く千切れ雲の結ばれては散り、散つては集るその動きを。或日は茜さす夕雲だつた。ある日はおそろしい雷の躍る雨雲であつた。或る時は暗鬱な鉛色をして今にも人間の心を重く壓迫せんとするかのやうな雲だつた。がそれらの様々の雲をやはり心靜かにいつまでも、何物かを考へさせられながら見つめて居る私であつた。

今でも此の感傷深い私の心には少年らしい夢の追想に似てよく雲の影が私の頭の中に描く。行く雲をながめる、そして『音なき波濤』と云つた或る詩人の心持を私は充分に知り得た。茂り合つた薄の穂越しに。或は赤屋根の側のボブラの葉蔭から、又は秋虫の聲しきる玉蜀黍の葉すえ越しに。或ひは漣にダンシングする池の面に、更に人の瞳に映える白雲の蔭さへなつかしいものと見た。大空の風に順ふ白き雲は今日は北やら南やら行方定めぬ雲の徂徠は地上の私達に何かを話しかけながら行くのではないか。

行雲流水とは、はかない淋しい旅の身の上をいふ。しかし私にはそんな情けなさも淋しさも雲には浮べない。東西南北自由な身の雲の生活をむしろうらやましとさへ見る。今日の空は立秋の雲。又その雲を照してゐる光は幾何學的に放射し猶靜かにして庭柯露を浮べ涼意襟を襲ふ。此の際眞に一刻千金なる哉』と、讚美するに麗句を以つて表はしてゐるが、朝はあはたしい。夏はやはり夜だ。何時の間にか東北の山の端がぼつと明くなつた。火事だらうか。月夜と知らぬ悲しさ。こんな事を考へながら見てゐる。氣のせいしか少し明るくなつた様な感じもするが何時迄も變らない。山ぎはは曇つてゐるのである。月を見ると數多の思ひが湧く。冬の月はすさまじい。凄壯である。とはよく人は言つたものだ。これに反して夏の月は圓滿と云はうか、或る懐かしさの感がある。蟬丸の名曲を傳授したのも、義光が足柄山で中秋明月の夜、笙の秘曲を傳へたのも此の様な宵のこの月であつたらう。今夏この故郷へ歸つた夕は山間僻地の宵はあくまで靜かであつた。瀧川の流れの音に合はせてす、きを渡るそよ風の音が、耳に残る。月は今川向びのお寺の大きな銀杏の木をはなれた。大きな月だ。闇の世界をばつと照らした。遠く鳥の歸るのさへ見える。不圖後ろを見ると二人の子供が小猫を中に話し合つてゐた。亡くなつた親の事でも思ひ出してゐるのではなからうか。なんだか、一切が自然に抱かれてゐるやうで靜かであるとして懐しい。

夏は夜瀧の宮なる瀧の音  
鮎狩の人歸りゆき月出でぬ

## 星

五年 大菅 繁三

蟋蟀が鳴いてゐる、静かに鳴いてゐる、一つ又一つ。じつと耳を澄すと、遠く微に聞えてくる川の流、落ついた物静かな思索と冥想にふさはしい秋の宵である。

前の柿の木がはつきり路上に黒い影を落してゐる。

街燈の下に立つて、我は空を仰いだ。

廣漠とした空間に燦然と、星は輝いてゐる。

青色の星、微かに光る、又洋々と南から北へ銀粉を撒いたやうに、白々と底知れぬ大空をかすめてゐる銀河のなぐれは、何といふ壯大な眺めであらう。

この大空の夜の星の壯観は何に喩へよう。

私は今宵獨りしみんと、星を眺めてゐる。いや、今宵のみでない、私はいつでも、いや、實にしばしば星を讚美するのを惜しまない。

私はこの星を見る時、何時も無言の詩人となる。

そしてこの時、星は、この無言の詩人を遠い夢の世界、幻の世界、天上の樂園、へと導いてくれる。

星は何時見ても美しい、あの春宵の星も、夏の星空も、四季さまざまに移り移る天上の大景觀は實に底知れぬ興味である。又淡い黄昏の空に唯一つ夢の様に瞬く一番星も、よく幼

い頃を想ひ浮べさせる。

星は又、色々の美しい物語を、數へる事の出来ない程多く美しい、優しい傳説を有つてゐる。

これを知る時、我まは古代の人が如何に優しい素朴な心を以て星を見たかを想像する。

星は又神秘である。

星の有つてゐる神秘性の偉大は、確かに自然の崇高と天界の悠久とを物語つてゐる。

古來よりこの方、人は生れ人は苦しみ人は死す人事世態の幾變轉を星は悠久の過去から、さつと永劫にながめかへしてゐるのだらう。

私の生れぬ先から同じやうに、星は輝いてゐる。又老いたる後も死んだ後も同じく神秘の星として輝いてゆくのだ。

私の心は星にとつて慰められ、躍らされる。そうして又心の底の底から清められる。神秘なる星、大空の星。

## 夢

五年 佐藤 匡男

夢つて不思議なものだ。或時は得意の夢、或時は不遇の夢又或時は戰國時代の若武者となつて戰場を駆け廻る事もある

何時の世にも、不思議で美しいものは夢ではあるまいか。青年にして夢を貪る事はいけないかも知れない。だが夢は又一つの無邪氣な人生の慰安者である。夢の意義を擴大すれば二十年後三十年後に自己を想定して空想を展開して生活する青年の心の中にも亦夢ではないだらうか。

## 偉人の教へ

四年 奥山 晃

自分が日頃念願の學校に合格した夢を見たとか、或は大層出世した夢を見たとき、目が覺めて「何だ、馬鹿々々しい。夢だつたのか。若し今のが本當だつたら」と思ふ。又、今にも死の奈底につき落されやうとして「はつ！」と目が覺め、汗びつしよりになつて「あ、夢でよかつた」と思ふ事もある。

だが、夢に苦しめられたからと云つて、憤慨してはじまらぬ。それが夢だつたから消えてしまひ只頭の中だけの悲劇であり、喜劇として終る。そしてそれが、又夢の持つ生命の全部であらう。假令それがよい夢にした所で悪い夢にした所で、明けりや思ひ出の夢と浮べてすべて美しい。作家が原稿用紙の上に躍らした自己の考へを後から讀み直して微笑むやうなものでもあらう。さうだ。夢も亦一個の自分の創作である。

偉人も凡人も等しく夢を持ち、大人も子供も平等に夢が興へられ、昔も今も又未來永劫に無くなる事のない夢。

偉人の言行は、一として吾々の教訓でないものはない。僕は發明王エヂソンに幾多の教訓を見出す。エヂソンが幾多の大發明を爲し遂げて名聲を轟はれるに至つたのは、主として努力の結果である。彼は何か新しい發明を思ひたつと、幾日も幾日も研究室に閉ぢ籠り、文字通り寢食を忘れて一生懸命あらゆる方面から此れを研究した。夫人の心を籠めて作つた御馳走が、彼の研究室の卓上に冷め切つて居る事は幾度もあつたといふ事である。

或る時彼の親友の子供が學校を出たばかりで、此れから社會に出ようと思ふのですが、其れについて、何か心得になる事を御話し願ひたいと言つた。エヂソンは領いて快く握手を興へ、そして研究室の壁に掛つて居る大きな時計を見上げながら「決して時計を見ない事、此れは若い人の覺えて置くべ

き私の忠告である」と言つたさうである。

「時計を見るな」誠に成功を希ふ者が服膺すべき金言であると思ふ。苟しくも一事を仕遂げんとする者は、其の目的に達する迄は、總てを忘れて此に専心精進すべきであつて、早く歸りたいとか、遊びたいとか、休みたいとか、そんな意志薄弱な心から、幾度も時計を出して見て、其の針の動きの遅いのに心の惑ふ様では、目的達成なき思もよらぬ事である。此は吾等學生は勿論のこと、社會に出てからも全く同一で、時を忘れて熱中するほどの熱と意氣があつて、はじめて成功の域に達することが可能である。

「時計を見るな」僕はこれを一生座右の銘として進みたいと思つてゐる。

## 國民性の一部

四年 石崎 英 男

大日本帝國海軍の艦艇の内に、都市の名を負ふものを尋ねてたゞ碎永艦『大泊』を見る。山靈に待づき、河川に親しむことの餘りに深かつた日本人にとつては、かゝる人間の小さき營は多くその關心を引き得なかつたかもしれない。何れにせよ、十餘隻を以つて數ふる特務艦の群を見渡しても、そこに見るものは悉く我が四境の海に突出する岬の名か、又はそ

れらの海をつなぐ海峡の名のみではないか。曰く「知床」能

登呂「劍崎」石廊「室戸」野島「佐多」……。それらはすべて、波を枕の海の男子が、ひとしく、したひ、あこがれる懐しの海の岬の名のみではないか。しかし新興「ドイツ」の艦名を見渡すとき「グラーフ・フォン・シュペー」がある。西洋史を學んだ人はしつてゐるだらう。かつての世界大戰に、フォークランドの沖にて傾きをめる夕陽と共に沈んだ全滅艦隊の司令官の名である。かゝる悲運の名將の名を取つて、やさしくも、その艦に名づけた「ドイツ」國民の心こそ、涙ぐましいまでに、うれしい限りである「勝てば官軍」の心理は何處の國民も持つに相違ない。それなのに、いかに悪戰苦闘の果、祖國の旗の下に息たえた勇將の名とはいへ、あきらかに全滅艦隊の司令官であるのに、新興海軍の主力として、明日の望をかくる艦に、ほこりに、先づ名づくるに、その名をもつてした「ドイツ」國民の意氣の前に自分は肅然として衿を正さずにはをられない。吾が國民よ、深く考ふる所なきか。霧とさす日も、嵐ほゆる夜も、ひたすらに對島の沖を守りつ、心を碎き、身を勞した名將を一度は露探。賣國奴とまで毒罵した日本人!!さらぬだに虚弱の身をむちうつて、君國のためにポーツマスにおいて奮闘した眞の愛國の士を、磔の雨を以つて迎へてたらず、その首に匕首をまで擬した日本人!!徒に、皮相の事に、狂し、熱し、附和雷同する日本國民!!

自分はこの一部の日本人が將來帝國の隆運に禍するところ多かるべきを心ひそかに、おそれて止まない。

## 喜びと使命

四年 山本 恒次郎

長い休暇も終りを告げて、一月振りで見える先生は、相變らず頬の凹んだ、毛の薄い頭をして居られる。而し、何處かに元氣横溢たるものが有る。

「一寸、休暇中の感想を云はう……。君達は幸福だね」と先生は不可解な前置をして。

「十数年前の日本は思想に於ても、經濟に於ても、全く暗憊として居た。而るに、今は躍進に躍進を重ねて居る明るい國となつた。故に、日本が此の躍進の波に乗つて居る時に生れ會はせた青年諸君は幸福である」と。

又「職業に従事してゐる現代青年は極めて少い給料で早朝より夕刻にまでも及ぶ激しい勞働を厭はず、且つ、日曜日にも出勤して、黙々として働く傾向になつた。彼の歐洲大戰の敗者ドイツが再び戦前のドイツの姿に立ち歸らんとして居るのも、ヒットラー總統の配下にあるドイツ青年の孜孜没々として働く力が一大原因をなしてゐる。斯様に黙々として働いて居る日本の、或はドイツの青年の心中には、専ら國を思ふ

心が宿つて居る爲だ。

即ち自己を無視して御國の爲に盡さうと云ふ高い見地の下に凡ての物事を眺めて居る爲である」と、云ふ意味の事を話された。

思ふに國家が繁榮するには利己主義を捨て、國家の爲に盡す心が國民一般に行き渡る事が必要だ。又、一方には此の國民的自覺を益々強くせしめ、之を巧に生かし得る英雄がなくてはならぬ。

此の小さい島國、日本は幾多の英雄を生んだ。鬱蒼たる森林より突如バツと日の差す平野に出た如き秀吉を生んだのも日本だ。大海を見て居る如き自然的な偉大さを持つ南洲翁を生んだのも日本だ。剛堅な中にも優雅な、風流千古に香しい義家を生んだのも日本だ。維新の根源となりし日本外史を作りし文豪山陽を生んだのも日本だ。又、此の小天地に枯死するを潔しとせずして異國の王となり、異彩を放つた山田長政も日本が生んだのだ。

而かも、英雄の國日本は、花咲き、鳥鳴き、翠波は洋々として巡り、冬は蜜柑の實赤く、夏は芙蓉の峯に千古の雪が光り、變化極まり無き美くしさを持つて居る。我等は此處に於ても幸福だ。即ち、我等は幾多の英雄の物語と、秀麗なる自然の無言の教訓によつて育まれて居るのだ。

かくて、我等は大きな夢を抱き、其の夢の殿堂に向つて邁

進し、終に、其の殿堂の鍵を握つて、日本史に不  
名を刻  
み込まねばならぬ。

榮え行く日本の後継者は我等青年だ。秀吉の如き、南洲の如  
き英雄も我等青年の中から出てずして、何處から出ようか。

## 個人と國家

四年 松本顯美

私は嘗つて置時計が少し遅れ過ぎるので、中を掃除し、中  
の機械を研究してやらうと、蓋のネヂを取つて油で掃除をし  
てゐた。終つてから解剖したのを組立たてる時、ネヂが一つ  
ないのに気がついた。私は探しまはつたが、結局は駄目で、  
も早やその時計は廢物同様役に立たなくなつてしまつた。そ  
の僅か一つのネヂで時計が用をなさない事は、恰も個人と國  
家との關係に類似してゐるやうに思ふ。何となれば國家は個  
人の有機的延長だからである。この事は尙一人間の身体にも  
似てゐることである。

故にこの様に思ふならば、よく言はれたことであるが、個  
人が立派な人格者、知識者となつて、始めて、村、町大きく  
しては縣、延いては國家が健全なる發達をするのである。立  
派な國家、それを形成する社會はその包藏する分子、即ち我  
が國に於ては臣民が立派でなくてはならぬ。又同時に國家は

協力が必要である。協力は力の經濟であり、力の増大である

無益な反抗、競争は勢力の浪費で國家の進歩に害がある。だ  
から國家に於ては個人が互に力を協せ助け合つて、始めて個  
人の義務は達するのである。このことは文化の發達と人類の  
幸福との爲に、最も必要で且つ人としての自然の要求である  
然し協用に就いて個人を内面的に考察するならば、個人各  
々について個性がある。だから國家は個人の個性を尊重しな  
くてはならぬ。國家が發達するにつれて適材を適所に配して  
個人の長所を發揮させることが必要である。不適任の地位に  
立つて、自分に不得手な業務に従事すれば、一生失敗を重ね  
るばかりで、人として此の上もない不幸であり、國家の不利  
である。故に個人の個性を尊重し、協力することは、國家の  
進歩する所以である。其所に國家としての成長がある。

國家は個人の健全な發達により立派に成長する。だから國  
家は個人を無視つては存在し得ないと同様、個人の進歩は國  
家を忘却しては個人はあり得ない。故に我等は自己の國家を  
深く認識理解し、以て立派な完全な國家の一人とならなくて  
はならぬ。斯くして國民はそて國家と共に繁榮するのである。

## イタリヤの

### 國運發展及日本の非常時

四年 桂 喜久造

世界大戰後、赤化の大颶風に捲き込まれて、一たびは將に  
倒れんとしたる伊太利は、青年の手によつて支へとあられ  
そして堅實に復興した。その目ざしい隆運は、今や世界の驚  
異の的となつてゐる。自動車専用道路を有することに於て世  
界一であり、開懸事業に於て世界一であり、水力電氣に於て  
歐洲第一の國となり、世界史上初めて組合制度の國家を實現  
し、職業代表の議會を創設し、その他萬般の施設に、大膽に  
して徹底せる精神主義の新文化を歐洲の地に造り出した今日  
のイタリヤの國運發展は、悉くムツソリーニの率ゐる熱血青  
年の偉業である。『理論により造り上げた道徳は、やがて又新  
たなる理論によつて覆へされる時がくる。道徳は理論ではな  
い。信念でなくてはならぬ』との見地から、道徳の信念化に  
邁進しつゝ、光明に満ちた將來の建設に努力してゐるのも、  
青年イタリヤである。斯くてムツソリーニのフアツシヨ運動  
は、遂に世界の國家主義運動の模範となり、世界フアツシヨ  
の總本山となつた。ドイツのヒットラーは勿論のこと、ハン  
ガリー、チエツコスロバキヤ、ポーランド、フランス、和蘭

英吉利に於て、南米諸邦に於て、到るところ國家主義運動が  
フアツシヨ精神を基礎とし、國民統一を目的として、現代に  
適切な仕事をゲニノ、やつて行く、實行力のあるフアツシヨ  
式の運動が、今や世界を動かさしつゝ、あるのである。これは屁  
理窟で行詰つた西洋が、簡單にして大いなる正義に依り、國  
家と言ふものを大目標にして、國民全体が動いて行かなけれ  
ば、今日の國民の苦しみは救はれないと言ふことを、痛切に  
悟り得た結果に外ならないと思ふ。

その意味に於て、今の日本に於ても、イタリヤのフアツシ  
ヨ運動に學ぶべきところが多いと思ふ。勿論イタリヤの事を  
その儘に模倣すべきではないが、その精神に於ては、探つて  
以て他山の石となし、参考にすべきものが大いにあると思ふ  
今や日本は非常時だとか何だとか、騒いでゐるが、眞實の  
非常時の日本と言ふのは、是から始まるのである。それは非  
常時とか、國難とか言つて、國民がビク／＼震へ上るやうな  
怖い悲しい時期に入るのではない。

日本が英國に代り、米國に代つて、完全にして牢固たる日  
本の地盤が、全世界の指導者として確立されると言ふ、歡ば  
しい非常時、光明と希望に満ちたる非常時が、今もう一步の  
努力に依つて完成せられようとしてゐるのである。これから  
が本當の昭和維新であり、これからが本當の樂しき歡ばしき  
非常時の日本に入るのである。日本民族あつて以來、嘗て無

かりし曠古の大躍進が、今日吾人の方に依つてなされようとしてゐるのである。日本人が、役人も、國民も、資本家も、勞働者も、何處までも『國と共に榮えよ』と言ふ信念を以て國家と言ふ大いなる目標の前に『信ぜよ、服従せよ、奮闘せよ』と言ふ大結束をなすにあらざれば、日本の大使命は斷じて達せられない。使命が大きければ大きいほど、その事業は困難である。餘程の大覺悟を以てか、らねばならぬ。此處に於て、我等昭和青年たるもの、大いに緊陣一番せざるべからずと絶叫してやまない。

## 旅行の快味

四年 山川 茂

『旅は憂いもの』『可愛い子には旅をさせ』の諺は胡麻の蠅群り、雲助横行する道中を大部分が自分の足を頼りにとぼとぼと歩いたもので甚だ安全を期し難き益のものであつた。駕籠に乗れる人、馬に乗る人も關所や、川止等種々の障害があり家族水盃をして別れたのも尤な事であつた。然るに現代は道路は整ひ、橋は架けられ、警備は行き届き、鐵道は到る所敷設され、都市には電車網が敷かれ自動車、自轉車その間を快走し、今や旅行は人生行樂の最も大なるもの、一つとなつた。是亦聖代の餘澤と感謝すべきである。

現代の旅行にはその方法は頗る多種多である。就中汽車旅行はその第一に趣あるものと思ふ。車窓から刻々移りゆく山川田園を賞し、名勝史蹟を指呼し、地圖の研究に精進し、倦めば靜かに冥想する等舉げ來れば數へる邊がない。ひとり晝間のみならず、夜行の列車も又趣あるものである。暗を衝いて猛進する列車の勇ましき轟。車中では窓外の眺望を奪はれた旅客が種々の話に花を咲かせる、お國自慢、旅行漫遊の自慢話、世間話、政財の話等に未知の人の間にいつか感情が融け合つて、何年後までも思出す名前知らぬ友人が多く出来るものである。月の夜もよい。青白く染められた野や山が夢の様に走りゆく等趣多い。又暗き夜も劣るものではない。點々と疎密な燈火があちこちより送迎して呉れ、都會のイルミネーション等、決して平凡な趣でない。

其の他純然たる學術的研究の旅行、懷古的趣味の旅行は特に特殊な深遠なる意義の下に於てその愉快さ、面白さは想像以外のものであらうと思はれる。近時ハイキング、登山旅行が頗る流行し、これに合せてキャンプ生活が幾多夏期學生の憧憬の的となつた。險難を攀ぢて豪健なる氣象を養ひ、山川秀雲の氣に觸れ俗慮を一洗する等恐らく如何なる方面にも修養があると思ふ。一体旅行は誰にでも味ひ得る大衆的の趣味である。紅塵萬丈の苦熱の境を離れ大自然の懷に還つて精靈の清淨をはかるのは旅行にまさるものはない。夏冬春秋の四

季を通じ、天氣風雨雲曇の日に大自然はそれ々の趣味を持つて吾等を待ちうけてゐる。近時社會が益々此の趣味を鼓吹し、各人が務めてこの趣味にひたり大自然に接しようとするは誠に當然の事と思ふ。

## 交友

四年 横田 證眞

人が此の世にある間は、若者男女の別なく、おのづと朋友を求むるものである。極幼い時分は遊び友達を欲しがり、學校へ行くようになれば、話し合つたり勉強し合つたりする友達を求め、獨立した後は、職業上の事を語つたりする友達を求め、さうして此方で強いて求めないにも如よ、自然に同僚同級の知合も出來れば、又同僚同業の懇意も出來る。つまり我々は友達の中に於て生長し、朋友の間にて修養し、又友人の中に於て夫れ々、職務を盡して居るのである。斯様に朋友は我々の生涯を通じて甚だ大切なるもので、利害の關係を有し、互に感化影響を及ぼすものであるから、古人はその善惡を選ぶべき必要を説いて『水は方圓の器に從ひ、人は善惡の友に依る』とか『朱に交はれば赤くなる』とか『麻の中に生ずる蓬はおのづから直し』等と教訓されて居る。

ところが、世上の實際は、兎角良き友と交ることが少くし

て、悪しき友と交る事が多く、また益友を捨て、損友に近づきがちである。これは良友益友は方正謹直であるから、何うも親しみ難く窮屈であるに反して、悪友損友は多くは諂佞柔媚であつて始めより親み易く、放縱でさるところより自らこれに陥るのである。而して其の結果は言ふまでもなく、交る朋友が品性が高く正しければ、吾々の品性もおのづから高く正しくなるが、吾々の朋友の品性が下劣であれば、吾々の意志が強固でない以上は、同じくそれに染まつて、知らず知らずの間に悪き感化を受けるものである。我々の意志が強固であつて、それに染まらないとしても、下劣な品性の人に交るのには、それに依つて少しも己を利し、益するところがないから不利益である。吾々は本來模倣の性質を持つて居る。殊に年少の時代には意志が強固でないから、言はず柔軟な粘土のやうなもので、その觸る、もの、如何によつて、如何様にも形をなすのである。錆の爲には如何に鋭い刃物も役に立たぬものになつてしまふ。錆がついてからこれを磨き落すよりは、錆をつけぬ用心が專一である。されば我々は是非とも朋友を撰擇しなければならぬ。朋友の撰擇の如何によりて、一生の浮沈の岐る、ところであると言つても、決して過言ではあるまい。

## 寄宿舎回顧談

四年 村井 博 一

第二學年以上の人は、あの今の庭球コートから講堂迄の間に建つてゐた古い建物を知つて居られるでせう。あれが寄宿舎だつたのです前は南北寮に分れてゐたが、人員の減るにつれし南寮だけになつてしまつたのです。私が此の中學校の入学が終つて四月六日に同郷のN君と二人で寄宿舎に來ました當時人員があの大なる建物に八人と聞いて驚きました。

早速上級生に入寮の事を話して今後の事を頼みました。

寄宿舎の舎監三人當時杉原先生石坪先生で寮長は五年生で始業式の日任命されました。他に炊事係が二人居ました。人員は五年一人、四年一人、二年二人、一年一人、二年二人でした。最初の夜先は舎監先生と五年の人に手傳つて貰つて勉強場を作り押入を定めて頂きました。二室に四人宛別れて勉強するのでん。最初の夜先づ入浴します。大きな風呂に入る所謂歓迎ストームの如く『御大典』と命名された式が風呂の中で行はれました。二人は唯あつけにとられて了ひ、早く上つて部屋に歸ると次は食事舎監先生を上席にして食事をするのです。食後校庭でランニング野球等の運動をしました。

九時消燈の合圖に入學のよろこびを腕に夢を結ぶのでした八日からは規律正しい生活に初りました。即ち

とが出来ないのでした。

第一學期の末寄宿舎解散になつて名残多き舎と又生活とに別れを悲しみました。

最後の日は皆荷造した荷物に腰をかけて、しみじみと感激の生活を語り合ひました。其の夜校長先生と最後の夕食を共にして寄宿舎生活を終つたのでした。

## 虚無僧池

四年 木村 昌 太

僕は小さい時から老人に色々と言話を聞いた。諧謔味のあふれた老人の話ぶりに今に變つた不思議な傳説を胸に書いて樂んだのである。僕が色々聞いた傳説の中で特に印象の深いものを記して見やう。

今僕等の村の西南に一つのこんもり繁つた林がある。この林の中にある虚無僧池について次の様な傳説があつた。

それは丁度今から數百年もの昔の事であつた。當時此の村は花垣の里と呼んでゐた實に平和な村里であつた。當時此の間は今日のやうに生存競争のほけしい残酷なものではなかつた。村の周圍の田地に米を作り生活するだけの米さへ得ればそれでよかつた。金持にならうとする者もなかつた。安樂をむさぼらうとする者もなかつた。何の欲望も邪念もなくその

起床六時洗面、掃除、食事、人員点呼、勉強、登校、晝食外出、運動、入浴、食事、人員点呼、勉強、就床、消燈、毎日〴〵繰返されました。外出の時は自分の名札を裏返す事になれて來た。木曜の大掃除も皆一生懸命です。第一學期臨時考査終了後二階大廣間で夜らうそく、本で集合、此より寄宿舎怪談の初りです。

先づ床の間の花びんは、此の中に北寮を壊す時に死んだ、大工の首がある、一回覗かせられた。ブーンと異様な香がするが中は分らない。次に圖書室の天井の血の手形。第二室の逆柱此は夜中にキーンと泣く、開かずの便所等代々の上級生の話に二人の一年生は青くなりました。試験會公衆グラウンドへ夜中に明日の教科書を雜糞に入れて置いてあるのを取りに行く、途中に上級生がいろんな事をして驚かしめ。柳の木の下に白い物がある。恐しく思つて走る目的の井戸に駆けて持歸つた。

食事は二室交代に献立をつくるので、他室のものは嫌ひな物も食べなければならぬが、次の時に仕返しをやるのです。第一學期の本考査が終ると、庭球部、野球部、ボート部の合宿が初まりました。皆面白い上級生の話をきいて感激の寄宿舎生活も過ぎました。その間野球部は例の怪談部屋に泊りました。

當時投手のFさんは非常に怖しがりで便所へ一人てゆくこ

日その日を送つてゐたのである。

此の様に天真爛漫な村里に或日一人の虚無僧が表はれた。彼の吹き鳴す尺八の音はあまりにも單調な此の村の色彩に紅をそめた様に鮮やかにうるはしかつた。その日から毎日の虚無僧は此の村に現はれて來るようになった。純朴な村人は自然此の虚無僧に慣れ親しむやうになつた。虚無僧も木訥な村人に好感を抱いたのであらう春も過ぎ夏の季節となつても毎日といつてもよい程何時も訪れた。

炎熱焼けつく様な或夏の日でした。此の日も村を訪れた虚無僧は彼の池のそばを通りかゝりました。朝からの巡業と太陽の炎熱で彼の体はすっかり疲れのどは渴き切つてゐました勿論、虚無僧はすひつけられるやうにして池に近づいたのでした。緑したる木立におぼはれた池の面は別天地のやうに清冷でした。しかし渴に堪へ切れない虚無僧は汗をぬぐふいとまもなく池の中に足を入れたのです。そうして水を掬はふとしなその利那彼の足はそのまゝ水中にすべり込んでしまつたのです。あはれにも虚無僧はそのまゝ、池中に姿を没してしまつたのです。急を知つた村人達は驚いてすぐさま駆けつけました。しかし虚無僧の姿は再び池面に浮び上つて來ないのです。秋空の紺壁よりも濃くすみきつた池面は今起つた大事件もそ知らぬ氣に波紋一つ書きません。周圍の冷たい空氣がひしひしと身に迫り余りにも意外な事變が目前に起つた



ので村人達は失神した様に池面を見つめて立ちつゞけてゐるのてした。

平和に慣れ切つてゐる村人は此の一人の虚無僧の變事に非常な衝動を感じたのです。村人は此の事件に大戦役でも起つたやうに騒ぎ出しました。しかしそれから幾拾日かたつた或日又大きな驚きと疑問に悩まねばならなくなりました。それは彼の虚無僧の死体が伊崎の濱に發見されたのです。伊崎といふ處は此の村から二里近くも離れた琵琶湖の湖畔なのです。勿論虚無僧がそこまで流れて行つたといふことに不思議を感じたのです。又しても村の中は様々な噂が飛び散りました。噂は噂を生じて遂に一つの結論にまとまつたのです。それは池底に湖に達する隧道があるか又は池底がそのまゝ湖に達してゐるのだと云ふのです。今考へて見ると實に馬鹿らしく思ふのですがさうでも考へねばさうにもならなかつたものと見えます。

その虚無僧の池と云ふのは今行つて見ると小さなものが昔では虚無僧一人の死に對してもかくまで取沙汰し騒ぐのは如何に其の當事の世俗が純なものであるかを想像して今昔の感を深くするものである。

## 里の秋

四年 矢野 秀雄

琵琶湖畔の我が里に、爽やかな秋が來た。今日此頃の日和に、寄せては返し、返しては寄する湖岸の小波が、澄み切つた空の色を映して、鮮かな濃青色を呈してゐる。

收穫の秋、而も豊饒の秋、百姓の人達の朗かな對話が聞える。

「有難い、お天氣さんでー」

「はいな、有難いことで。おうちもう仕舞ひやしたか」

「い、え、まだ、これからやも。えらいこつちや」

辛いと言の言葉にも似ぬ笑顔を、朝日が照らす。まことに農家の人達には、字義そのまゝの粒々辛苦を收穫する秋は楽しい時は、年中に又とあるまい。

數日前では黄金穂波の田圃が、今は早や、六分通りも刈り取られて、黒い沃土に紫雲英の緑が、眼につく。落穂を漁る雀が、チュン、チュン、と如何にも樂しげに飛び歩く。温い感謝の心持からであらう、案山子が、お行儀よく用の畔に臥かされてゐる。

廣い田圃の彼方にも此方にも、一家總出て精一杯に働く、郷の人々の姿を見ては、敬虔な心が油然と湧き起る昔田人勞作の講を壁間に懸けて、朝夕禮拜を怠らなかつた越後の聖僧

良寛和尚のゆかしさが、つく／＼と偲ばれる。

あ、田圃の秋、碧空のやうに心の澄む秋、感激の秋、思索の秋。僕は年中で、一番好きだ。

## 弦月に寄する頌

四年 北村 忠夫

輕やかに投げかける金色の霓裳の、

金絲銀絲の金屬的な觸れ合ふ音、

足下です、り鳴く蟲を誘ひて。

それは弦月の優しき悲歌、

そして我が魂への義はしの憩ひの歌。

宵闇と共に徐々に明かになつた弦月の光に、ほんのりと白い私の姿を線路に近い田圃道に見出しました。初秋の事として稲の穂も夜目に黒く垂れて居ます。チホノ、秋の先驅者の虫の聲、涼風に身を任せてサラ／＼鳴る稲の穂は、秋の精の衣ずれかとばかりに……。立秋をとうに過ぎて、此所田圃の夜も秋一色に塗りつぶされて、其の上に濃やかな夜氣が秋の潤ひを含んでふうはりと立ち籠めて居るのです。口一杯夜氣を吸つて、秋の土の香の中のガードの方へ歩いてみる事にしました。かうした夏から秋への過渡期に田圃の夜趣を探つてみるのも面白いと思ひます。

ぐ頭の上を、今も光の帯の如く列車が痛快なスピードで闇の中へ疾驅して行く。列車の後部のデッキの上で何か金屬性の聲を残して。赤き光は見る／＼吸はれて行きます。もとの静寂に歸つて虫が鳴き出しました。すぐ眼前に迫れる連山に列車の響がこだまして居ます。會社のネオンも夜氣に潤んで赤く微睡むて居ます。

仰けば初秋の空氣、黒曜石の如く何處か冷い涼味を帯びた夜氣に、黄石の如き星が顔へてゐます。涼しい、寂しい、美しい、そして遠き夢を見る様な閃き、西天に弦月の優しい姿がか、つてゐます。

私はちつと弦月を見つめました。私は何かしら法悦を漁りたいのです。私がちつと見てゐると、心中より熱い涙が湧き起るのです。青白き月の光が私の魂に囁きかけると、法悦に浸る感謝の涙が胸にしみ出るので。私は弦月程慎しやで美しい物は少いと思ひます。造物主の手の中で靜かに眠る夢の如き星に、遠慮深げにそつと半天にか、つてゐるはりがね月は何と慎しやかでせう。造物主の支配の下に、大宇宙の生活の享樂に遠慮深げに、而も、絢爛の花園の中に慎しやかに紅彩を放つ花の如く、幾多の黄石に擁立されて燦として核心に囁き來るのです。慎しやかで而も、燦たる夜空の女王の戴く王冠であるはりがね月、これこそ童心の憧憬だつたのです。知人が何物かの残骸の如き二日月と言ひました。然り、残骸

と見れば見られます。金色の夜叉の虚な手と考へれば考へられます。然し私は何處迄も、慎しやかな優しい弦月として尊敬し、楽しみ度いのです。まことに弦月の光こそ我が魂の愛撫でなくて何てせう。

そして煩悩の人生戦線の荒波にもまれて、荒み切つた人間の魂を和らけます。生活の享樂の缺陷に不足を感じる人間の魂は、法悦に浸る信仰の喜、感謝の涙にのみ清淨なる満足感を見出します。其所には煩悩、生活、社會等一切の人間の荒み切る魂の原因とも見做される事物は存在しません。虚空より送り來れる光の波がひた／＼と人間の荒み切る魂を和らけ洗ひ清める様に、實に澄み切つた雰圍氣に浸る事が出来るのです。満月に尺八の二管を手向ける瑟瑟たる情趣も眞に捨て去り難いですが、消え入る許りのはりがね月に對してゐると追憶の念にかられてすゞろに泣き度くなりません。其の追憶の夢を貪る時、我々は昔の赤裸々な、天真爛漫な童心に歸つてゐるのではないでせうか。そこに望月の一管に託する風流と拮抗し得る理由が認められるのを、何人も否定する譯にはいきません。實に、弦月の搖籃の囁くかぎり、我々は無邪氣な童心を蘇らせる事が出来るのです。緑衣の天使の、生命の波動の漂ふかぎり、我々は光の中に赤裸々な一脈の生命を大乾坤に託する人間本然の姿を見出すのです。それにつけても、あの陣中忽劇の間に在つて、三日月を信

れる小川は、晝間の夕立の烈しさを物語つてゐる。

仰けば、西の空は、山とはつきり境して、ほんのり白んでゐる。何だかあの山の向ふに幸福が住んでゐる様な氣がする。振り返ると、東の空は全く暮れて、此の山々は紫にぼかされてゐる。到頭村はづれまで出る。

廣々と擴つてゐる萬頃の田、淡青い月光に隅なく照らされてゐる田、稻葉を渡る風に『ざは／＼』と波立つ田。今年は豊年らしい。視線は野を過ぎて、村を圍む山に當る。

晝間は生き／＼した緑に包まれて、嚴かに立つてゐる山も今は黒く靜かに眠つてゐる。

五位鷺の一群が、僕の神經をおびえさせて、野の眞中に立つてゐる小さな林を掠めて飛び去つた。

月は磨いた如く玲瓏と照り、夕立後の空は紫紺の色を湛へその眞中を銀河が流れて無數の星が光つてゐる。

あ、何といふ淋しさだらう。又何といふ美しさだらう。淋しい！山の向ふには歡樂の世界があるだらう。けれど此の山間の人の居ない様な村、それは月の世界かも知れない、冷えきつてしまつた地球の最後の姿かも知れない。急に何かしら偉大な物に絶りたくなつた。

美しい！神秘的な美、寂寞の美。宇宙永遠の謎を秘めて過去より未來永劫にわたつて擴つてゐる夢空の美。内から湧き出る詩情を感じずにはゐられない。

仰せし山中鹿之助の美はしくも優しい夜話と思ひ出されます。そして日本武士の雅懷敬虔の心を思つて、思はず微笑むのです。

嗚呼、天地惻久の間、亦弦月長久にして幾人の心を和らけ樂しませるでせう。

凄い音を立て、下り列車が、通り魔の如く、銀蛇の如く、一瞬にして通り過ぎ去りました。月の國への法燈の如く哀れさを持つ紅燈の影に、月を憧れて向ふ私を思つて、列車の赤い灯を、何時迄も／＼唯恍惚として見送つてゐました。

## 月の夜

四年 横田繁勝

宵闇が密に忍び寄るのを感じながら、庭の沓脱石の上に立つてゐる。上弦の月が淡い光を投げかけてゐる。

晝の夕立に、草花は雫の垂れる濡髪を地面に伏せ、樹木の葉に宿る玉は、一つ／＼眞珠の様に光つてゐる。

夜の帳は漸次下りて來て、月はだん／＼明るく光つてくるふと聞くと、蟲の音がしてゐる。錯綜して湧立つ様に響く蟲の音は、日比煩雜な勉學に没頭してゐる僕の冷えきつた感受性を、温めて呼び起してくれた。興が湧くまゝに表へ出る。すつかり土砂を洗ひ流した道路、潺湲たる水音を立て、流

此の淋しさ、又美しさ、いかに多くの人々が、宗教的な思索を、又藝術への憧憬を寄せて來た事であらう。今尙多數の人々が今宵の月を觀て、或は宗教を思ひ、或は詩作なきに耽つてゐる事だらう。

僕はまたしてもしみ／＼と月を仰いで、恍惚として何時までも／＼立つてゐた。夜もすがら池をめぐつた翁の様に――

## 顔

四年 柴田隆行

我々の顔程正直な廣告はない。顔程微妙に其の人の内心を語るものは無い。性質、才智、人情、人格、身分、等寸分のいつはりもなく、そのまゝに表はれるのが、顔である。地獄の閻魔の廳に淨玻璃の鏡と言ふのがあつて、亡者生前の善惡の所業を、そのまゝ寫し出は言はれて居る。けれども地獄にわざ／＼行かなくとも各々の顔が、即ち淨玲瓏の鏡である。いくら自分の心と正反對の言を吐いて人を誤魔化さうとしても、顔にその思ひ通りの心が表はれるのだから却つて誤魔化さうとする卑しさが増すのである。考へれば考へる程、顔と言ふものはうまく出來て居るものと思ふ。性質は大人しいが頭腦明晰な人は、大人しい中にも何所か賢さうな顔をして居るが、怒りつばいが人情の厚い人は、怒りつばい人でも人情

の厚さうな顔をして居る。又すなほではあるが頭の悪い人は、何所か間拔けた顔をして居る。狂人は狂人。犯罪者は犯罪者。圓滿な人は圓滿さが各々性格により表はれる。故に私はキリストや釋迦の顔は、そんなに美しかったであらうと思ふ。子供でも年少の子供は非常に美しい顔をして居る。子供の癡て居る顔はずつときれいだ。何故ならば年少の子供程無邪氣で、いつはりのない心をもつて居る者はない。彼のベンジャミン・ウエストの大畫家も、彼の幼少の時、守りして居る子供の、すや／＼とねむれる様を見て、思はず其の子供の顔をわすれない様に筆をとつたではないか。或人が「眠れる子供は玉座に置け」と言つたが、眠れる幼児を見つめて居ると、本當にこれと同じ感が湧いて来る。そして大人は必ず自ら大に恥ぢなくてはならない所があると思ふ。詩にすぐれた頭をもつダンテの肖像を見ても、あの男性的智力と、意志の持主であり、又詩的天才であると言ふ事が、我等の胸に刻まれる。これは勿論性格が顔に現はれて居るのである。

偉人にして、もその顔は力に満ち、ひきしまつた態度であつた事が顔に現はれる。これらの人々の顔は、容色が美しいのとは、全く正反對な別の事である。目鼻立がよくとも、内心もよくなければ何の美しさも、何の價値も、その人の顔には表はれない。邪氣のない顔が一番美しい顔である。我々はその性格。内心が一目瞭然たる顔をむきだしにして平氣で居る

のだから、これからは益々修業して、常に俯仰天地に恥ぢざる公明正大な人となる様心がけねばならぬ。

### 小夜の海邊

四年 日比乙三

白波が汀にくだける音は、言知れぬ魅惑をそよる。遂に僕は海邊に出て見た。葉月の夜空は明るかつた。而し凄い程氣味の悪い黒雲が月を包んでゐた。その爲に僕の足許は極めて危ぶない。波の音は今晚に限つて妙に又果てしなく瀾ひのある淋しさを感じしめる。足を運べば、ザアラ―砂は意外に柔らかい。しめり氣を含んだ柔い砂。それはよけいは懐しく感ぜられる。僕は一步步強く固く踏みしめた。海の彼方は暗かつた。眞の闇夜であつた。その闇の帳の中に一つ二つ數ふれば、もう少しあつたであらうか、微な鈍いあかりが闇夜を無氣味に照してゐる。一瞬。僕は次第に無氣味を感じ初めた。僕は海邊に誘ひ寄せた静かな波の音も、いつか淋しい、さうして恐ろしい、怖いといふ心を抱かし初めた。妙なる花には棘がある。微妙な波音は惡魔の囁きと變つた。と思ふと僕の顔をさア―と、冷い風がなでて行く。それは海邊獨特のあの萬里の太陽を渡つて吹いてくる鹽分を含んだ微風といふものかも知れぬ。それは、人間生物の身體に觸るれば、健康にな

ると、いふかもしれぬ。而し今の僕の心には、その考は微塵も起らぬ。僕の心は震へてきた。僕の心は一時も早く我がテントに歸ることを望んだ。汀に寄する妙なる波音をも、今は恐しさに、心の底まで震はせた。僕の足は急ぎ出したが、惡魔は砂の中から足をつかむ。心はいらでつ。眼は不圖海の彼方をながめた。闇だ。黒闇だ。惡神の帷だ。あの眞黒な帷の中には眞黒な惡魔が――。眼はいつしか、空に向つてゐた。墨を流したやうな漆黒の雲は、次第に下界を壓して我に迫つてくる。月の姿は何處にも見出されない「あ、」海より空より地より眞黒な惡魔が我を呑まんとす。氣も魂も飛去つて、肉塊のみの僕は、恐怖、焦燥、足は空を飛んだ。惡魔が後から、しぶきをかける。それをふり切り／＼、無我無中走り續けた。

### 初秋の景色

四年 辰巳敏男

流石の暑さも一雨毎に消えてゆき、朝夕は分けて涼しく、蘇りしは野邊の小草のみならず、吾身も轉た健やかに、久しく棄てし筆さへ幾度か手にする時節となつた。日中の殘暑は未だ感ぜらるゝ中にも、すく／＼と顔を現しゆく稻の若穂、木影に群をなす赤蜻蛉にも秋の氣酌はそれとうなづかれる。

### 嚴島に詣でて

四年 大橋壽貞雄

嚴めし嚴島よ。波間に浮ぶ大鳥居、いや浮んで居るのではなからう、嚴然として立つてゐるのである。其處に此の島の名前があるのだらう。 　　みんな波にもびくともしない朱塗の大鳥居形こそ美麗ではないがその荒削りの丸太と言ふか柱は帝國日本の實質強健な

日本古来の文化を永遠に保つにふさはしい眺であつた。

麗はしき殿島よ。それは夢の國ではあるまいか。五月の緑樹は一層芽ばえて櫻雲の中に鎮座してゐる。宮は朱塗の殿堂その間を嬉々として戯れる鹿の群。海は油を流した様に小波もない。春の海ひねもすのたりのたりのかな、彼の蕪村の句を想ひ出した。眞にその通りだ。春の日さしは殊にたさ眼を感じる。太陽は笑つて居る様だ。庭の眞砂がキラリと光る。波はヒタヒタと柱を洗つてゐる。早口の説明は良く解らなかつたがその由緒深きことの遠く上古に及んでゐることは注意を引いた。一人の媪が扇で自分の額と燈籠と互ひに叩いてはしきりに何か祈つてゐた。何のまじないか知らないが此れも此處無くしては見られぬ光景だつた。

その昔毛利就成。陶晴賢の軍がしのぎを削つて戦つた所と何う思えよう。夢の島殿島は未だ眠つて居る様だ。

築しき殿島よ。宮の後を守る彌山は天に山立してゐる。険しい坂を喘ぎ喘ぎ上る。人跡未踏の自然林。特別保護の立札が目だつ。緑煙の中に絹糸の如く細そりと長くかゝる瀧こ、にも又夢の國を物語つてゐるではないか。

頂上から見下した景色大小様々に浮ぶ島。碗の浮いてゐる様だ白帆の影が二つ三つ浮ぶ。眞にうつとりした景色。

駈落ちる様に下りた思出の殿島。船は島を離れて行く。

さらば殿島よ。これも一生の想出の一つにならう殿島も視を背や頬に感じながら落葉の徑をそことしもなく通つてゐると、或る小さな小徑に笑み割れた落葉の實が一つ二つ枯落葉の上に落ちるのを聞くのは、秋に好ましいもの一つである

### 松茸

小春日和の或る一日臺所の隅を不見ると新しい羊歯を被せかけた籠があつた。その中に頭には土ぼこりを、尻に落葉の一片と山土をつけた菌が頭の圓い小坊主と一語にころ／＼と横になつてゐた。

『おう、松茸かしばらくだつたなあ』

私は久方ぶりに舊友に會つたやうにかう思つてその一つを取り上げてみた。冷い山氣のある秋の山の匂が手から体へ浸み入るやうだつた。

菊には菊特有の氣高い香があるやうに、秋の山には山みづかへの匂がある、日光が充分に降り注ぐ松山の山土の傾斜、ふやけた松葉の推積より踊り出したこの頭の圓いこの小僧は松山の赤土に映がれる匂を遺傳的にたつぷりと持ち傳へたちやき／＼の秋の小伴である。

### 柿

秋と云ふと直ぐ柿を思ふ程私は柿を好む。

果物通より見れば柿の存在はさう大したものではないかも知れぬが、あらゆる果實の中で秋の一番好はなものは柿の味である。柿にもいろ／＼種類があらうが普通の小さい堅いのが

線を越えて霞の中へだんだん消えて入つた。

## 秋の風物

三年 一谷道雄

### 空

また秋がやつて来た。  
空を眺めよ。澄み切つた大空——深い——透明な——桔梗色をした。桔梗色のま、でもよいが、時折白雲が掠のたやうに靜かに行き過ぎるのも悪くはない、偶には雲の代りに小鳥の影が矢のやうに横切るのもよい。

澄みきつた秋空を背景とした瓦屋根に健康兒の雀が『チチ』と鳴きながら——本枯しを思ひながら——秋の空に魅せられてゐる。秋の空は何とも對照する——山・近代的の明装した建物からアンテナに止る百舌や一つ二つ取り残された柿の本に至るまで……

### 山

山の静けさを味ふにもこの頃が一よい。  
感じやすい本々の葉はもす大半散りつくし、透けた本の間から洩れ落ちる晝下りの陽の柔かさ。四周のものかけから、冷え／＼と流れ来る山氣をかき亂すともないつつましやかさ

好きである。

柿の實の頃になると私は畑を一廻りするのが日課となる。それは好物の柿を枝からちぎつて食べるからである。父は柿黨であるから私の柿好きも遺傳のせいだらうと思つて見ることもある。

### 彦根城の秋

古城のさびと静けさを味ふには秋に如くはない。  
老松深緑の間より明暗の二階調から成る素材な力強い天守を仰ぐとき往時の武士の面影を聯想する。

城山を割つてゐる濠は青く淀み、うら枯れた眞菰に集ふ小魚の水面に浮ぶのも長閑な秋の日ならでは見られないスケッチ一頁——

入相告ぐる鐘の音と共に眞菰を縫つて行く小舟の脊闇の中にかくれるのも一種の詩情がある。

空だけ明るく残り城山が次第に暮れ行くところ青い炊煙が縁の中から棚引き眞菰が爽涼の風を受けて戦々頃、西の空に三四日頃の新月が何處かで鳴く雁の聲をのせて靜かにあの古城を照すとき、瓦・壁にうつる月影までが秋のセントメントを多分に含んでゐるやうに思はれる。

### 秋の謳歌

我が日の本の國民の唯一の主食である米の取入れが秋であ